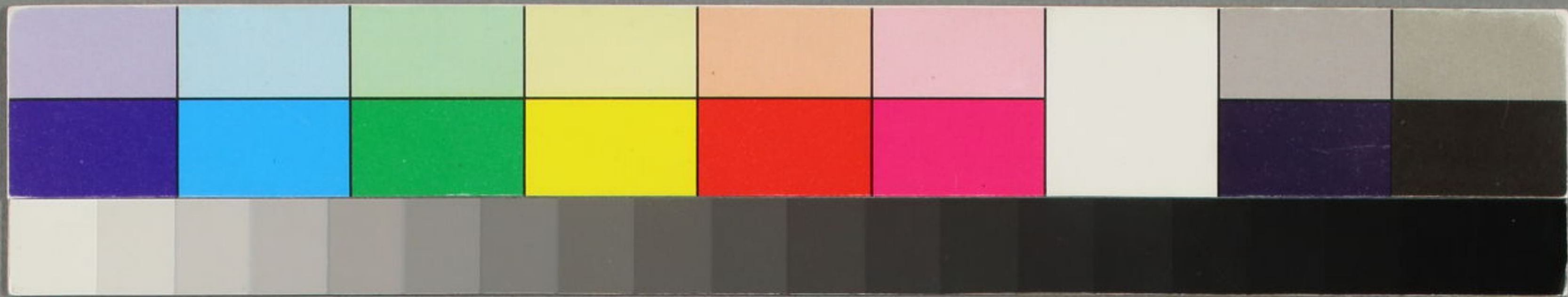


貞享式海印録
二

5
4630
2





門 へ 5
號 4630
卷 2

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

貞皇公海印錄四

曲寂剛述

二月 狂事

春月花の風雅の的之月月々あり花の
に季はむて記せ八月と定ふらん中略は乃又
先へ出ス
初人の人いひ月七の月の花は十三の月あり
をひき他人へ譲る時直之りよありても
子細ありき初月冬風雅の乃其あり
あてけしめ乃理を初てまの月ひの白牙
おきよとあひへらん乃冬風雅の直は毎
傍のある白ゆき其時の初は初は初は初は
お授者月むの社とよする初は初は初は初は
おの月冬風雅の初は初は初は初は初は
あてし初は初は初は初は初は初は初は
かすし初は初は初は初は初は初は初は
附五のり初は初は初は初は初は初は初は



なる月ありて苦く只表の月一ツ
 程も月花ある言へ又引上て出月む正花
 正脚ありてまど脚字の月むきふ用之始
 二月 三月 四月
 ▲月の初より陽を以てこもるる
 立てお向は能成する所く出ると
 月形武カ仙ト穂カトハ上段の正く出
 カ仙ハ中段吉武カ仙ト下段の正
 月又何の是も月と月とあるも
 同キ異キ異名ユカシトても五
 考くまて八句ある表の月の
 ハ月を七句メをよめて陽の八句メ出ると傷
 あき表きく月の後や隙あきぬは初
 表他キの月イ名の月出或は月むの代
 らは月出の字ある中皆お向より能する中
 是は控取を行むとてかきしてする事あり
 休字あり

△脚字の月

休字あり

休 休又ありの古ま尾の月 菊
 去 去久をその名はか カ号
 炭 炭持をくりたる 夕 夕 夕 夕 夕
 脚字ハ傍ある處に記ありて作る月字
 移るをいば向皆空たあきと脚字を用る
 毛表段の是と矢さる所へ仮令引上ては不
 とも社と動付付の表するんあてん付とす
 ▲秋亦白くして其正なる月 多伝者
 三無去秋の季流は白くして花月の白とする
 事必ある事との所没く

▲只所没くす連之花表の内は白くして下
 決して寺月の白くしての陽をすするは面
 二出るとおは二出るとおは二出るとおは二出ると
 へる月の白くして白くして日星の陰ありて
 へる月の白くして白くして日星の陰ありて
 向 向 向 向 向 向 向 向 向 向

秋 月あき池を曲る山居 一井
 小文 秋市ノ人のさる夕月 史邦
 兼秀 ちふくくの火を焚く夕月 正秀
 世也 さーて月を燈るのふさ 末彦
 白 杖もやうく 陽 夕月の月 許云
 东山 灯のともさる夕月 一彦
 其節 月を化移る 武者一人 三羽
 休 古我坊月も終上 虎ノ子 嵐之
 白 又記てある 神楽の七ね 権権
 折鶴を返る月 吉乃多君
 月の月いろ白き一帯 定彦とあすいカ仙 二
 不い 夕月坊の平儀 又ウハ
 僧 夕月をかくす 秋 秋の月 誠人
 哲 夕月の夕月の夕月の一ひら 融和
 箱 夕月の夕月の夕月の夕月 木角
 雅 夕月の夕月の夕月の夕月 彫業

夕 夕月の夕月の夕月の夕月 白桃
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 杉風
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 元代
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 徳子
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 ソウ
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 ロカ
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 丸吉
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 素氏
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 邦
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 天蓮
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 栄幸
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 柳五
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 三井
 夕 夕月の夕月の夕月の夕月 三井

おんカ仙の苦い草より一思のおおん

▲おの志うやあなをさすや次の例もよ

衆 月あまのき上博の泣きより 月牛

△折口(引上る)月 涼ト

七き 月をたをりて清の日用も 貨角

其節 師博の文すりたるお月 信風

他節 去りたる月の世の月らし 暖

△英名月

を母あふ月を嫌むけりイ名に用ひおん

人もありお守イ名を用ひるおちと用ひるおん

去 乳をこし夜に背をたう世は カ号

去 傾博乳をくくすお 昌圭

お抱女の素乳をぬるほぬの心付くされし下也

難あふに在室も暖トカすまきと林されお月

片せむよさるに国のおおしと忍惟おんトハ

望よりイ名の入用はくわのてり

秋 十陵の彩との毛なる白牡丹 女我

みの 彩あつしき極陽のお 風之

西様 極くけり。乃めよりお 花黄

冬 西南に桂のむの蒼む時 抱笠

難 久のめ急もまら母さる 吾友

夕云 雲の心あすの約き彩のれ 我笑

夏 仙 乃のおぬちの力乃らさる 和板

十七 さくらえ男 櫻山 信之

市 彩より桂男の 小枝

フリ 乃よきれぬすおん 丸

春 乃のおの草をそれる八幡翠 ト

天 立行も中言はれおん 乙由

云 九云おん 杉の 曉 山

別 乃くくるとなる 雲を 八葉

合 乃 已はさる川 嵐や 帆

他 果あるをんあり 因云 蕪門 乃 娘 妹 合 到

雲の彩あふ古式に用末よりおを用ひるおあり

その姿の玉きて自らさし桂舟ふきの波
もゆる作きりて用れたまも掃く

△イ名カ仙は二

多保者

沖を渡るあはれし舟の空は 舟
あはれし舟は舟の舟に 舟云

さしは又男 戻らうり 嵐雲
殿をの走ふちの糸きり

あはれの舟をなをききのせて 舟角
ちるといふ舟の雲白りり

桂衣殿命の園は待をて 其三
あはれも花の心のさしりり 枕如

あはれも必治治の歌あれや 燈天
桂田の登一をあるさき 靴 氷

△回他十月カ仙は二 吳他十月保畧
是れ古今通式なる回他十月にさしりり

門邊の舟は舟に舟をて 舟
おれは舟の舟をせりきち 千川

孫

あの子乃 樹を思ふ月をて 村女

山

山をやくあはれさききり 舟

孫

月あの子のあはれさききり 舟

三

桂下やれおきりんと冬の日 支考

孫

桂果てはれさんと月の子 ソセ

孫

月の子あの子りり 舟

△カ仙三月短白の妻格 舟
其月月短白の妻格 舟

△カ仙は短白の妻格 舟
其月の妻格 舟

孫

七時をき出りりり 舟

拾 石踏つて一寸花城の月 ソラ
碑よねて象々の月 月 月
をよおやの 月 月の十五夜 志英

拾 橋きりあきき月も版多
真つむ舟の窓よき月 月 月
月の風よ 月 麻の 門 月 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 折しおま月よ翁喜 仙化
月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

拾 月よや佐むも雪の月 月 月
あより冷る月のせりり 月 月
身よおまてうねの月 月 月

| | | | |
|----|------|------|-----|
| 北登 | 東屋の月 | 西屋の月 | 松緑 |
| 方角 | 下南の月 | 東の月 | |
| 去 | おの月日 | 候の月 | カ号 |
| お | 奥の月 | まの月 | ヤ水 |
| 表 | 月足歩 | 六の月 | 白之 |
| キ | 夕月 | 候の月 | ソノ |
| ヤハ | あまの月 | おの月 | 系地 |
| 何人 | 言の月 | おの月 | 母夫 |
| 印 | 候の月 | おの月 | コセム |
| 舟人 | 候の月 | おの月 | 三船 |
| 松 | 竹の月 | おの月 | 竹筏 |
| 生 | 候の月 | おの月 | 桐葉 |
| 葉 | 候の月 | おの月 | その |
| 種 | 候の月 | おの月 | 僧川 |
| 仙 | 候の月 | おの月 | 三船 |
| 恋 | 候の月 | おの月 | 伝徳 |
| 一足 | 候の月 | おの月 | 似夷 |

| | | | |
|---|-----|-----|-----|
| 白 | 白の月 | 白の月 | 白の月 |
| 衣 | 衣の月 | 衣の月 | 衣の月 |
| 候 | 候の月 | 候の月 | 候の月 |
| 仙 | 仙の月 | 仙の月 | 仙の月 |
| 月 | 月の月 | 月の月 | 月の月 |
| 東 | 東の月 | 東の月 | 東の月 |
| 角 | 角の月 | 角の月 | 角の月 |
| 仙 | 仙の月 | 仙の月 | 仙の月 |
| 古 | 古の月 | 古の月 | 古の月 |
| 式 | 式の月 | 式の月 | 式の月 |
| 月 | 月の月 | 月の月 | 月の月 |
| カ | カの月 | カの月 | カの月 |
| イ | イの月 | イの月 | イの月 |
| 印 | 印の月 | 印の月 | 印の月 |
| 七 | 七の月 | 七の月 | 七の月 |

と付たり今有風情よきあるへり付し西
む引上月より出されいを流る。雑りし
舉てよきあるさるを定い月あつて付さる所
二月を引する時定い月出ると風雲有力
といふ。故に其真を勝て舉白と冬を流る。約
▲月い面よりあつてえか仙にあらるとる句後祀の月の
者候と云い定たりきれり月の月い者候あり
あつてよく月花あつてよして後祀無及呉の時
あつてよくするさるの候い定い中祀草「橋分食
自らこち橋分祀小りホは種始さるる」と

月の子付石の柏子葉て来る 土新
他 八月むを紅の宮い 田原い 支考
昔 名月の解は南なる冥赤也 素文
+ 版の居すいあるおてあつて夜月 月
皆月の根よりあつて月の林 長川
あつての宮乃けき五月月 月
後

秋あり月おれお毎仕よき多原 巴丈
あつての宮乃けき五月月 月
百白八月の候い「紫ハタ等揚定伏 東山玉垂
ホはあり笠松七十一候二月の宮もあり

△秋式二月カ仙

本カ仙の候い二花二月もあつて表の五
句も二月おて祀り七句も二月秋とする事
秋キもあつて秋キの植わはる。秋キの句あつ
ねつて表つて二月もあつて苦る事きききき
は後等する人もあつて下まも亦一度合釈あは
▲矢百式お侍羊角許六去来くされい三子の中
は後等する人は送云をきりては式をさへき
をばあつてあつてあつて一もあつてあつて
世をきりて各箇りあつてあつて八去来より
後再撰矢百式の志あつてあつてあつてあつて
寺保はるは式をさる。秋キの句あつてあつて

秋不句の付ら大方才之と正月出て花さるる
 長々れん為の三月カ仙はせよは之表程よりた
 定まらぬまきそ方之と花出る付此の月を
 表し出る程の飾あきか一月の程の途出
 又及者の不句も季も扱限るる付月を
 表すも出 際極を愛せよは之更も亦た度
 舎秋あふと一 秋式不句のほまらばか
 けりし物あ人の集も老の力仙と秋式交出
 熟惟よハ相伝わはけれ予さ出控あひ
 のとあふ元末カ仙は月あるを二つあての者
 あれと又ウ者て余よ兼少く月と連て
 季三つへまの信をある極古き二つあて
 先の妻格のささこささのほより季ま
 ふりまの人 秋式のと用るは二通は更門
 カ仙は月三にあらるをまる人も柿よめり
 群う程移せ定をすも被之

△秋武カ仙表はせる月

シ、 五月の月の様ユキアむ境 向 拙風
 甚 月又えは一寸の戸も鳴く 牙花

△原氏四月の位

有そ途原氏行は始や四月の者信キカ仙は文
 原氏の中二角を除くおかれ秋風のはとあ
 いさあゆめカ仙また四月あるは原氏に
 とあさるうは更の時信の妻格をむ
 やささうわおあ人の人へ持てく

△結きまあり月

イセ 月おはあそぬ十おの夕角取 拙如
 月を月をこりて何きり

△月面三層て去 吉今同

印 共ささるる 月の 後 小枝
 月を月をこりて何きり 月 秋生

三正 月を月をこりて何きり 月 秋生
 うのすりとあはれ日目の月の表 行庭

子

紙

お月よむのやせりきち 千川
 夕月よ極木約出き障の内 天松
 月代のえも松陰に初冠 外故
 十田を極て又田眺を夕月秋 匠玄
 尚てい水うちあき目の窓 花村
 一を果つるあまの月の為くと 仁之
 一名他キと遊るも白まに

△月日星をさう二ま 古今言 ②

百折

はるるふれ灯行るこれの月 花
 おぬの早の未一ツある 支考

三匹

まをさうし中二日のあ 水南
 抑のそのさうさういおの月

月日

白く 白くいさくいさくいさく 女朱
 白く 白くいさくいさくいさく 女朱

△月一月次三言 古今言 多行省

▲世月次ある所の何白まにイ名すは物と
 季の月一二月次は字まの例も三言去

子

杖

紙

白見

夕見

八号

残照

七号

心は連る人もあり月一白まに五まあを
 早く又ぬを帰る二まよ海を何もあ
 旅療やあきき月の舟 伯 池子
 後をいさくいさくいさくいさく 花
 月あきぬを極る 山房 一井
 月の中の昔は就男い早く 片岸
 月三不あうし月一花月 天
 月月の板といまぬつれ雲 林身
 雲二下る 月代の事 園持
 雲あきよるるさあ月の夜を 若白
 陸より初き 小のうり月 花
 三ま引つる赤月おのま 新
 八号の月の月をこれ 新
 年守村の澄やさ月を 花
 月くけし若のあまのあま 丈草
 七号の月一十五まあを 乃

△カウとカワニ去

名月ヨ尺八さう人向む

うきまやいひく正月

△川の日垂ユイ名然不煙

和月まる字ユ風の南初て

和の多き虫も皮さうぬ

うほの口うもくと望るれ

おのの及ぬまやち務

さうくくと栗の林風

名月何々きうてまめむ

△青の日垂ユイ名正月然不煙

川一ツはマまきおぬり

定まの毛ム田上の尾

正月も竹の出りハる

名月もまやけさうり

冬暮美の上エまをち林の風

名月根のりく尾。おぬ

夏
加亮

夏
美州

夏
水

夏
柳

夏
一通

夏
杜良

夏
天垂

夏
月

夏
文州

夏
西

夏
ソフ

冬暮
登舟

冬暮
杉風

其苗

梅月の梅むいり守中

おのの竹のこゆい

一考くくと嫁さち遊さうむ

玄沢も二月もまそそぬり

名契のりまソウの版へき

村の日舟捨ましれらぬ

吉五

六月や界うまきおく嵐山

是の爲持舎と名不秀仙の不言くけまきのなるノ

おてイ名の月の浮たあり野さうらへん仮名こやく

加し執事の御あは二月八月と仮名よせ持

月とつ一字の寄とあしと始

△三三三、仮名かかれぬか、さうまう字形とびて

イ名と用しは浮たまあしはさうまう二月

さけりりまきんくま丁の猪を御あは持舎の

七心ま支たもまうそれ二月と月と二去

の許あはま持後の会まうらたあまうまう

嵐山

秀和

舟竹

新水

嵐山

始

△月、休せのれ哉不倅

東園 休せといふ所をとらぬとい名の月さつて下
秋の煙のいさへ接く但海は月も月も秋も月も
△月、休せのれ哉不倅 煙は月も月も秋も月も
よさき一何れよく自注おぼえのやとあるや

爾 休せのちねあ人を招くもの
ふのほろい隣の人のさきや
おのゆるきほろい月 木角

夕 休せといふちねあ人を招くもの
まの序のいさへ接く月 八景
乃や十日の月の照くは 祀之

知ラ 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

社 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

如ラ 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

△日次、月、残不倅 吉三去七丁

九月 日永日初秋 秋の煙のいさへ接く
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

十月 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

十一月 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

十二月 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

休 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

休 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

休 休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの
休せといふちねあ人を招くもの

カイ印

赤巻

鬼松のうけやうりて夜の月 香水

目用

地蔵の秋もなき雲起 三考

見

日用や何や忘れぬ大子て 佐伎

朝のや百の日記の対居一 可也
草のさそく信人の家 老
水にこころよしの園のあはれ 持昇

自注日記の表紙にうらた月と題するは

自注月と題するは支考彼の赤三倚馬也

コハオカニと云ふは、子考のこころ

△月ノ降筆風思樹新天未成不煙

支考月と題するは煙と云ふは月ノ煙守と

つる月自の妻と云ふはまこく始

▲正字の松水降くは月と云ふは月ノ煙守

五月西と集て平一モ上川 為

馬丸 客の客とつあ一舟 旅 一葉

瓜畑のまこころ月行て ソフ

高きりり松や松すきあて 奉日

一橋

如乃始を日自あき 千甲

依ての温泉をさき月志し 三考

海神の降そ十枚の橋の月 杉風

悪びる一 持子 橋 酒美

三考のまこころせきあはれ松守 一

井のの屋で晴る月のみ月 季邑

三考の向るは月松の山 貝家

考まのの中一むれ丁の声 丸白

一扇きの白や月の影し 千山

風冷しとワセの穂揚 冬月

と丁工物の序を海達て 龍海

合おあきさきり歌く西星 神夜

小僧は茶で勇つく歌 揚水

扇を扇つき一考月影 案草

佐くつる空を嵐の吹やして 考

松のあはれと通る公家尻 舟七

月々丹日暮れわくう下巻 去来

梅香

月々丹日暮れわくう下巻 去来

| | | | | | | |
|-----------|------------|-----------|----------|-------------|-------------|------------|
| 八 | カ | 市 | 枯 | 夕 | 野 | 鳥 |
| 八号 | カク | 市丸 | 枯 | 夕 | 野 | 鳥 |
| 新舟は乃男あめあけ | 初する二人の歌のやま | 浪安許し一扱きく秋 | 鳴きき陵格子の裳 | くくくのあふ古の春乃月 | 版志いし内文の出る乃月 | 叩志す機とこそ苦く杖 |
| 少海松き | 松のうら | 杉 | 松 | 松 | 松 | 松 |
| 子秋 | 杉 | 杉 | 杉 | 杉 | 杉 | 杉 |

| | | | | | | |
|----------|-------|--------|---------|------|-----|-------|
| 松 | 天 | 鳥 | 松 | 松 | 松 | 松 |
| 松 | 天 | 鳥 | 松 | 松 | 松 | 松 |
| お初め良馬くく月 | 久々のやま | 松の白よせの | 角力自惚は角力 | 花はすき | 舟の恨 | すむ月の横 |
| 葉桂 | 一待 | 松 | 行 | 昌 | 胡 | 松 |
| 松 | 松 | 松 | 松 | 松 | 松 | 松 |

カイ印
七

竹 杖を擡り 霞さの巻 ね山

編あし時々 社おれり 花

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

か夕靄のてうしあひぬる月の色 邦王

。入おそくい秋のそをふ 手芝

お 白の波はく 庭の青竹 竹風

。あの子をさうあうきり 紫柳

笠 杖うて見る園のお主人 白梅

。今よりいそぐお茶汲 柳豊

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

△月二同時分 杖を擡り 霞さの巻 ね山

夕日正極の情状 昌林
 山より月と車引控へ 和竹
 柳や蔭の日のて 隆上 玉久
 月次九日を未月と行か 勢
 惟子のひ子ある八九月 支彦
 月十五日お十之 日 反止
 国三月を月と名やれ 乙由
 ありもむもんのこし 桃如
 草粟と焼ひきて八九月 何声
 名 葉の子代かきて早九月を 藤流
 百石 ありそ花や柳の透通り 彦
 柳月乃とまわねん 天岳
 十三日お十と葉と又名新 甚二

木のこゝまおのえおのそ月山

△月とお紫の付

お紫おの秋竹を討てる時をきさふたを言
 と減れと見もておの時より一えより夕
 月おの月ト討る子柳ありとてさくさく
 行むも柳むむ法結せられぬおみさし
 一橋 櫻お紫を身酒り泣流て 可成
 桑乃月おの語脚くむ 菊
 山夢 村きよと名月の月を拾お 香か
 おまを西法悦さかの 月日 枝不
 毛をちをふみは出るささ 葉友
 四幅 字文子眼ささく月の下 康十
 お紫のとをけりる 通天 小
 菊 秋のあつさ名ゆらぬ月 赤角
 きり降く赤きお紫をまきよ 柳也
 三知く法結の記し

△月と雲と花火の付

月と雲と花火を結ぶ又花火を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ
花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

乙

川舟の橋と雲を引よして

壬

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

子

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

丑

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

寅

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

卯

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

辰

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

巳

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

午

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

未

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

申

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

酉

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

戌

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

亥

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

子

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

丑

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

寅

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

卯

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

辰

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

巳

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

午

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

未

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

申

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

酉

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

戌

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

亥

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

子

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

丑

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

寅

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

卯

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

辰

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

巳

花火の光を結ぶと云ふは花火の光を結ぶ

りお心のゆきされも母てすいそ怪あし

△月名不の付

冬作相

早月 月と文科花よりあつ付あしるふれ
字信と素就由はあつ付あしるふれ
防こあつ付あつあつあつ

古式月と文科は行向と種て吉押とあつ
行向を好守されははは今の用とあつ

意門はあつとあつ付と文科と文科も付又
あつを居あつとあつとあつとあつとあつとあつ
も許守ウヤヤのほは古式あつとあつとあつ

多き古式のお柄はあつとあつとあつとあつ
一 足はせはあつとあつとあつとあつ

桂の帆はあつとあつとあつとあつ
次はあつとあつとあつとあつ

あつとあつとあつとあつとあつとあつ

不誠よりあつとあつとあつとあつ

あつとあつとあつとあつとあつとあつ

△月名不の付

文科や早月とあつとあつとあつとあつ

月の名はあつとあつとあつとあつとあつとあつ
あつとあつとあつとあつとあつとあつ
あつとあつとあつとあつとあつとあつ
あつとあつとあつとあつとあつとあつ

△あつとあつとあつとあつとあつとあつ

あつとあつとあつとあつとあつとあつ

あつとあつとあつとあつとあつとあつ

あつとあつとあつとあつとあつとあつ

されお白よりきける月にお二款向とある
 及寸おつるお白の呼りも月にあるはしき
 ▲月をおよりきくはしきお白も法門人も係か
 きお上支く空位無日星あるをては及
 らるお白くむは然日次あるもを申せるい
 ち柄上をいする務し今日次月を擡て
 おらるあぬるはらのお白よりき
 きる月とのをきるはてある一きるはて
 は及寸と申し又とて日次月次と申し月
 をお白付毎々を申す月一は月とて
 いり又そのお白のしりてお止る実止の
 りては白のお白を再用の時、先人の
 をお白くはしき、已下お白の條よりお白の
 擡りて送麻さすはお白八条月たるは
 其二 諸人かくおける男麻のお白
 月を擡くは、おらるむ

是又付方の一件は彼のお白の金作より月を
 きけるお白は、あはれ麻の男振、又お白を用おて
 己らお白のお白あるも、このお白は、後て
 お白の条よりお白の條よりお白の條より
 らるお白の條よりお白の條よりお白の條より
 お白の條よりお白の條よりお白の條より
 ▲三 お白のお白は、お白の條よりお白の條より
 お白の條よりお白の條よりお白の條より
 擡りて換骨するお白を用おて、お白の條より
 お白の條よりお白の條よりお白の條より
 お白の條よりお白の條よりお白の條より

△月よりお白、お白、お白、お白、お白
 其二、お白、お白、お白、お白、お白
 其三、お白、お白、お白、お白、お白
 彼らお白、お白、お白、お白、お白

といふ事の持合の節向は秋分を過ぎるに依り
 南用を北より二部の界りおきて候合を云ふ
 もこそうも身もあつていふ事候合
 △此月も月次を正る日ニ記さる事柄を云ふと古式
 の秋分三まきとて出され候所の秋分三まき
 一より二の老は夜分秋の妻格ある自たを以て
 凡て妻格の文いかりあやう多し信はに案の
 月の相違を尋らる候事もあき他候あれ
 亦月の名に依り月の目立を初めむおん
 され候ははあやう月の法とてあつてあつれ又
 亦月あつて月十数ある候事さる月ハ
 一より尾より持葉の持指に但し信はに案の
 文月の二妻格あれ候事さるて下再出り
 文也 干おとてあつてあつぬじり
 門へまきとてあつて月用
 けけあつてあつてあつて干おとてあつてあつて

又下あつて新月の初めとてあつてあつて
 二より乃たあつてあつてあつてあつて
 案の持指とてあつてあつてあつてあつて
 凡候とてあつてあつてあつてあつて
 △此月も月次を正る日ニ記さる事柄を云ふと古式
 の秋分三まきとて出され候所の秋分三まき
 一より二の老は夜分秋の妻格ある自たを以て

△限月の妻格

え者あつてあつてあつてあつて
 句 やうり秋の風そよよとてあつてあつて

八月は振面白き小振候 西也

本通書も月次を正る日ニ記さる事柄を云ふと古式
 の秋分三まきとて出され候所の秋分三まき
 一より二の老は夜分秋の妻格ある自たを以て
 凡て妻格の文いかりあやう多し信はに案の
 月の相違を尋らる候事もあき他候あれ
 亦月の名に依り月の目立を初めむおん
 され候ははあやう月の法とてあつてあつれ又
 亦月あつて月十数ある候事さる月ハ
 一より尾より持葉の持指に但し信はに案の
 文月の二妻格あれ候事さるて下再出り
 文也 干おとてあつてあつてあつてあつて
 門へまきとてあつて月用
 けけあつてあつてあつて干おとてあつてあつて
 又下あつて新月の初めとてあつてあつて
 二より乃たあつてあつてあつてあつて
 案の持指とてあつてあつてあつてあつて
 凡候とてあつてあつてあつてあつて
 △此月も月次を正る日ニ記さる事柄を云ふと古式
 の秋分三まきとて出され候所の秋分三まき
 一より二の老は夜分秋の妻格ある自たを以て

月より一と秋を討ち八月より月次を
せり今八月黄坂はあはれ何の落たに月秋の
坊に修治有るおれいそきあはれ毎もあられ
毎夜有る修治の月より今をうけりぬる
[三] 有るの秋は只今の月の傍を合せて月と
字の古法を修治するまじか仙三花二月の先兆
といひまじり南庄の御用といひまじり修治
[三] 有るの秋は只今の月の傍を合せて月と
字の古法を修治するまじか仙三花二月の先兆
といひまじり南庄の御用といひまじり修治
まじり二人のまじり天来 天来 天来 天来
も月と一と一と修治の御用といひまじり修治
てる世の御用といひまじり修治の御用といひ
[三] 有るの秋は只今の月の傍を合せて月と
字の古法を修治するまじか仙三花二月の先兆
といひまじり南庄の御用といひまじり修治
まじり二人のまじり天来 天来 天来 天来
も月と一と一と修治の御用といひまじり修治
てる世の御用といひまじり修治の御用といひ

以式をあらうといはたはしむる月と用
仕は比は比の比をあらうといはたはしむる月と
去の比は比の比をあらうといはたはしむる月と
月と用とあらうといはたはしむる月と用
[三] 有るの秋は只今の月の傍を合せて月と
字の古法を修治するまじか仙三花二月の先兆
といひまじり南庄の御用といひまじり修治
まじり二人のまじり天来 天来 天来 天来
も月と一と一と修治の御用といひまじり修治
てる世の御用といひまじり修治の御用といひ

支考のつおの今と云とよも其けを合ふせす
 して述す又急考に似ておる自己の又を階に
 階寸とたはせりて分を省れ矢ありキ角のその
 中より両の両矢あり又変格に自在あるは木因
 キ角支考涼菴のに子く已下はは人上敬守
 秋らや物く夕のやまきく 知七
 西巻 ちりりりりりおに鴉のまき 素行
 族族の奇を推の袖ぬれて 支考
 星白に携あきさして六の表に白を一月と云
 了すりてあはれい後上族族の名を仮て月の傍
 を合らさるやまのそ花といひ史料を月といひ
 むは推る月むおあ守といひむ傍てあを田
 毎とえあはる山田の形容を移せさむやさうか
 らるもまのといひ史料といひて月花を
 假寸にたきられあわゆるうらうらぬと

佐考の眼力を志るべき

▲この方々の既月を二番しりて其キ格の扱はは既
 ころれつの変格の扱はは他え表あはる扱は
 時の格のまあるは依り又上六の表に白を
 まあ守にあはる自發の玄州の月あはるを
 西巻より又い表はあはるあはるの扱は
 まあ守に格のまある扱はのまあ守は園地の矢く
 十鶴さりとてまあ守とてまあ守 キ角
 尻さふらふるまあ守の扱は
 食 是守とてまあ守とてまあ守の扱は 楓子
 ア 四月の門のつきせしむ 角
 西巻集の之様上は屋梁の同左の出板あれし
 是を編はは四時とてまあ守とてまあ守の扱は
 毎キ格既月の扱はるまあ守の扱は 一子修は是扱は
 月山に月とてまあ守とてまあ守の扱は 一変格は是扱は

此持の奇は三三の山を縁十三年の五二十の
方の寅人を徳家より名は二月と持守りて
されは昔をたすより文二路を言ふ

月次二月を持守りて表格

は信あり天あり白面の月まき其教を信く

あら 又月やあらもたの持守りて

あらは ちのせなる木の一段 左栗

あきりしはくく相を令てソラ

は表二月あり梅すより名のおまはりには金

太字の胡縁を月まき白中二段を月まき白

より取られしは二月と持守りて

古字化此奇を引て信く非く

花持 信を志ありお持のは 田入

ハッロ山 月日の名を信く

信はくく大持り信書の教 梨水

執二言とちりて後表の口二名不出七八も又名不の

あきあきとちりて

名持の母はあきあき不持は其原は

の名知を信く

まのいとまは持の世を成はし

と古持よりいひ信をまけ

信くくくくくくくくくくくくくくくく

信く白の信を換授より信く

あるは古式のイ名わを用き

合言 古き連持より月とおて月白あり

又時の変よりくくくく昌福の

▲連沈もさあむ信の乃て其月

とれは信を信く

再出 信くくくくくくくくく

信くくくくくくくくくくく

信くくくくくくくくくくく

句の秘す。而行平業平の志き名にあはすは
 とは唐唐の祿門にてもる程はともある月の
 飾り文にて又名の冥合に神所ともいふ
 ▲六月月の一変格にて年暮の月を光と色とる
 ありの月はいま二変格の事ともいへるありて
 今の字もよむをいへるひとりなり
 振月を逐ふとまむは九条あり月を八条あり
 正も自己の及程とあす尺は尺は尺も
 係の不行止といふを程の程の變通を致せる子
 するの人の身も身を好むとあはすは月を
 照へくす月むすす神所の程用すといふ
 和すく係の言すくはく大木の名冷ありとあはす
 ▲六月月の如法法を廿古今の字もあはす
 して二變の月の月をいへる正月の恒れといふ
 きてたきとあはすはくすはくすはくす
 月を二變の月にて只世作の後を正風作といふ

或は月花の飾りは毎に夏と秋とと秋は夏にて
 月花一むす柄はとあす柄の中にて夏は
 秋もあはす夏は年と月をくはくはくはくはく
 条の月むすは月の變法を致すも程の程の
 こそはたむすはくはくはくはくはくはくはくはく
 程引くはくはくはくはくはくはくはくはくはく
 氷月お月よ行ふも秋も不短

日お月行灯お月お月お月お月お月お月
 八毛 芳柄の月を
 日にお月は八月ありぬはくはくはくはくはくはく
 夏は夏の月をいへる月をいへる月をいへる月を
 白羽 長月灯の
 月灯 月を白と白と合
 月を白と白と合
 月を白と白と合
 月を白と白と合
 月を白と白と合

返 新多く是よりお明り 先放

柚白 往き方の清きよきもあつむ 如行

白味 菜菜の月のまじり 夫柳

は 多しあきんい降下の月 西東

このまじりの部も何あり

おん ちび引けりて胸のちがひる 花葉

△月字あり月お正月よま

月日 是の月日早 早月お ちび月お 月お 柳の

お 又考の枯葉とゆる月日 沾木

月日 櫃子とく 柳の腐り ぬり 考答

又帝 危傍の氣流連る喜の月 百り

十七 考のく 曆月日 けり ちき角

考 ちび造 九月日 早みれや ちき

母よ似上りる月の日 蓮二

吉立はか白の契の金博え母の是きり 化社

の久よあれて 晩子よい子と考る 二花考の考

考多し田方おれ ちび 依は考の浮行

カ他今月の二花二月あり けり 月日早き声の

又おれ 打仔の月よ用は けり 早月お 乃

依はあて けりおれ けり 名の月を 用は けり

又後けり 浮行を 考る けり 古考 けり 母の 二花

裁入て 声よ 二花の 又よ けり 考る けり 二花

考る けり けり けり けり けり けり けり けり

又よ けり けり けり けり けり けり けり けり

三月カ仙と秋武の終と云く表書ノ正の
 月を分てめい秋武と云く寸へきあぐ
 星月三難 芭蕉云々早月秋林の月あり寸登
 白くは記出る付らるる去てイ名の月ありし
 此すも早月と秋の月の字云の去とあり却
 ち月秋も亦同じ月の字秋の終白妙
 して月と秋と終るとして何れも月とありて
 夏五次早月秋の序は去るは秋とて月とあり
 あり編考云々は名月あり付らるるは秋と
 ありて七月の月はた他事とてイ名とす
 ▲早月秋ありあり者身之ありて七月の
 こととも云々他月の月出るとイ名とす可
 但早月秋他キ之語あり他とあり
 注ハ 猿車ありて東の月と云く
 今ハ 月秋承子と云く 早月秋 嵐
 注十 猿の意とてめい名月 嵐

一 早月 八 酒ある室や少斗の早月秋 系松
 早月 九 ア 娘乃一柱の影の遠声 秋之

三去の傍わかれと云く通云之イ名と及ぬる
 月次月日の傍と云く又月草正字 踏踏草
 月毛約正字 辨あり月の秋と娘乃と云く

素秋なるも一

三無字日又秋の字とあるはすうとあるは
 ▲方之とて日星月次園而相晦とあり又秋
 月と云く 獨り月次ありてあるとす
 あり付らるるは素秋の終ありカ仙とて去去
 付らる秋決て守るるは素秋とて去去

△才こそ節なるス秋 多病者

花の度こそよむ時 やまかろ

おろや掃む時の草木 木を掃

七夕のひかりおのき ひかり

△又秋三お 合ハリノ下

白菊 白菊 菊の白 白

ひよりのそく 定 の約材 林

白菊 白菊 菊の白 白

町並の葉や柔 柔

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

△又 秋

竹 竹

終

衣の角を折ねわくありて 浦山

杖よりやまきりて秋の葉より 杉吏

垣の影のむらも実を折 同家

郊外位のぬいひ人のあききりて 志保

月にあらぬむらもあききりて 李仙

門のきりぎりすききりて 甚三

杖より名も風之実の入て 伯瓶

△ス杖の巻 多何者

雁のややま乃ある帆を舟 有巳

芳野もやま乃ある帆を舟 尚二

秋のきりぎりすききりて 和莉

△筆の巻 いくさくおすの目 甚三

△振舞ふもや初杖の目南 去来

△首もやまきりて 甚三

△小村をききりて 甚三

△二通 葉よりりて 甚三

△又月や丁もいりて 甚三

△出枝

△文月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

△お月

カイ印記

元九

かくつらむ初月の月を落林よすも付あはたし

卷之 句搦 他きの月出さる付表よス林をする月あり

▲他きの月出てス林ありも又あはれあつとも西何あり

▲又ス林の月古来も持あつ言秘之云の月ももま

よ連ス林の月呉をけり云林の月流くへ

▲古式之蕉門よ其さくあきま中流白も志あり

其方の月くス林と連ス季を結てス林をわけ

あはれ林よ引れて移るし初てス林の夜らんま

又ス林上他きの月下流くは移るもあつ又他きの月

出てス林あきへたのるし

根年

○青峰の草をえあす初月 菊

○初風の竹多景清きりて 菊

○陽店の林を障子ゆりき 菊

○社日東三つり身帯の深きや 丸

○門を人の海鳥よ守む月をえんて 丸

○はさむき初るあ萩の枹 家股

ヒト

○杖風下遊そくらく初夜表 以節

○あはれも初おの月是ああり 性子

○初ましく痛の方を下りあり 千川

○夕暮の月を今と干てる也 志守

○まよ西瓜をつけてゆく 菅森

○杖をくみ来よ二層れし 初

○スの中を碧合の障子たえり 森

○あきとそくろく初る下末 乙春

○松葉のまて来れへま投て一有

○はま初月の月あはれ先は空庭のあよス林出さる

○浮てもくそりまきや冬の月 其の

○鞋の出てりくおろし月あり 嵐竹

○名よこさくしし春をかえり 吉原

○冬の月白く直ふり梅花 乙由

○まよのまよのい何のまよあり 水甫

○夕暮のあきとよまけり茶おあせ 反止

○名よこさくしし春をかえり 林風 季流

東巻
八句

カイ印 卅

東山

篠月 おちとあつし又りて 木因
あつとこれの面白き杖 木西
松花 葉の木細ヤ 返りぬ 送

△百のさす去ニ又杖一歩の度格
スハ強も 初す美むる世し 藤樹
一花さく下ニそん山吹 手去

風の巻之度のはちわらして ト尺
流流まきのささひそめく 吹風

嵐文 破十矢流する者すく 云
道の傍り候 影ひりり 附

或ト又大あての松葉生より 嵐之
□日ノ降後 風辺 照天 然 然 不 燃

在 非 遠 天 象 月 日 星 の 一 一 律 律 相 傳 花 之 煙 如
ま ち 秋 の 人 乃 又 文 れ ち 人 位 二 煙 方 ち 一 但

考の歌よ天象をみてきて高而高月星もよこ又
字前れ押門は律年降風ホを属する去極の少
はあされし門部を寄るく終するあこれ類

你 夜うの排下いりるのさくしそ 石
きる ちえ州 烟のたのきりて 小三

畜百 ひくると一可 折鳴の 百子
系州 比宮の陰る二影の位あれて 支考

了了 社の下由くあ日ひのさく 牧童
考考して又又をいりる照陰 考

繞花 おれりる身よりよりく携る人 翁
おれらの白く夕日よりす心 曲翠

凡 早餅う茶を扇立て草花 考
杖風 扇の 門の 君より 一 翁

や ねよ並て踏す日のてり 養生
可くありのむいすへりくくと 泣き
世之きとや入おそつく 字中

休

ゆく中の世門の云々杖立て 酒を
あふす折れむ一まの 袴 支梁
西りつるむらぬのまらる 床 也并

秋

夕日のあふす折れむ一まの
むらぬのまらる 床 也并
不柳

天

すむ水う天の降る杖のくれ 殊妙
おし南と 枯折れり 水
居賈し三つ日候は是れ 約書

夏

△日二月次 残不煙 古ま 寺及多者
立あふる降る草の委日入 如行
陸木におろす折れむ 支考

春

あふ日よ吹て入る日よむむのき 栞白
ひう人の角を居す折れむ 杞考
正月を毛の生るを 白相
何くもふるもねむ心は月 後書

冬

あふ法の降る草を流あふる 小枝
西日さす入る雪の降る 考

秋

あふのありく日よむむのき 玉
翔よりあふすはあふる 甫杖
さすもれ山の杜の二月 考

夏

△日二月次 残不煙 古ま 寺及多者
夏向も世との降る日よ吹て 栞水
日よ吹て宮木の層は流は折 栞徳

春

あふ日よ吹て入る日よむむのき 栞白
ひう人の角を居す折れむ 杞考
正月を毛の生るを 白相
何くもふるもねむ心は月 後書

冬

あふ法の降る草を流あふる 小枝
西日さす入る雪の降る 考

秋

あふのありく日よむむのき 玉
翔よりあふすはあふる 甫杖
さすもれ山の杜の二月 考

△日よき日の日次哉不極
娘なてくくはちりもより
高き芝の中央の大きな
ふりふりして日よき日の
月打残し勝をきくをぬり
△日次二去
初親の西条を流し日の
空の日の日よき日のと
日よき日の日よき日の
ひよきの日よき日の
日よき日の日よき日の
晴か日よき日の
雨ささし拾ひの
多々の水さもたの一日
及の月よきの雨ささし
杖突のささし日よき日
△教字日次二去

白身

冬

対

り

並

子

三日月

白身

△日よき日の日次哉不極
娘なてくくはちりもより
高き芝の中央の大きな
ふりふりして日よき日の
月打残し勝をきくをぬり
△日次二去
初親の西条を流し日の
空の日の日よき日のと
日よき日の日よき日の
ひよきの日よき日の
日よき日の日よき日の
晴か日よき日の
雨ささし拾ひの
多々の水さもたの一日
及の月よきの雨ささし
杖突のささし日よき日
△教字日次二去

白身

り

開

ホシ

高

白身

日

文月

三日月

白身

杖もちやちやさるこれの月
情のゆん 百日の虫
三日月あけすよ一俵
娘松の位吉傷十三叔
三日月まおのりす取れて
はあけり大と
△日次二去
你実と星時きり草枕
ゆをよれゆく後声
ゆきふり日よき日の
ゆき日よき日の
ちおし成と白くおろり
日よき日の
葉名くくそそ日よき日の
三日月のふれと後ちあく
ゆき日よき日の
三日月のふれと後ちあく
ゆき日よき日の
三日月のふれと後ちあく
ゆき日よき日の

文字の多用して辨字通もかき加ふて字の字
の例に效り多用する字益目る字の嫌へり
甚るるまゝ一理万通の法云々

△日よきふむ
あきまはれてくちのち 糸 木守
依結構を日わきりり 徐子

△日よきふむ
日よきふむ専断不強
はれ日字ききも日の心あり 昔物今物 御書

△日よきふむ
辨立 辨字の心あり 日字は嫌す
程母よりのまゝなれり 香静
たををすい 付ちあく 丈和

△日よきふむ
結構を日わき舟のきり合て 和言
きのい言さるる人 汀菴
行来は夜を依て 標の花 菴本

△日よきふむ
日やけくさるる 依る心さる
あゝろの先くま 伴傍 傍業

△日よきふむ
朝日のおねもあゝろ 守居 菴 南菴

△日よきふむ
茶をくち 天をくち 務ろ 支考
身ふく ぬくろ あり 庵 枕り

△日よきふむ
親又の白も けり 白和
まおろ 何やろ 加合 白和

△日よきふむ
飛浮 行は出きて 空の 密水
林す きの けり 可及

△日よきふむ
なま 又 ね 承 忍 存 九 矣 費
ちり 七 ちり ちり ちり ちり 祇 徳

△日よきふむ
のの 用 念 の 床 の 生 花 ね 徳
む ちり けり 天 氣 又 合 伯 楓

△日よきふむ
△同作の日おま
きり 朝 日 白 子 ぐ 升 格 子 辰 化
ろ と 朝 日 の ちり 横 子 ね
は 木 舟 こと 花 ぎ 日 和 け 玉 風
日和 日 ちり 旅 の つ ぬ ぎ 空 浪 桂

カイ印記

三三

浪 ウツ 天の日 雲より 山吹の びら 花見
見 子一人の きのの 日は ちから ちとく 山之
 粧 目 少く 少く 花の 枝の 花の 枝の 形葉
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目

△同吉日 折去 東月日

去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目

市街

大坂の自慢 梅より 去日 目 去日 目
 折り 折り 折り 折り 折り 折り

星面去 目 去日 目

其節

星より 去日 目 去日 目 去日 目
 折り 折り 折り 折り 折り 折り

□花の事 去日 目 去日 目

去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目

去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目
 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目 去日 目

あつち抄寸まよすうらふふふ文首のさし始
▲系松の粧又文並から理あるは似れども東三花相
葉花の位乃支那の位白を認めなく去支那の
又二癖おておし終りきり多うきて圃圃入秋
の刺りけは已所キ角の葉よス杖のきお多ある
いづれ又雅月ありは武の人こそ雅月いそ
んん又花あきく又去出てなるの種お流し附
雅津種のおあつて冷房は是さるさ仕さす程
馬の口下は去出の財は必産を引よりて是は海出り
又津種花ありは是る相威は二武武連の古武よ
效て初るのこ花いえずう法をさすも何あり
▲本武の出花條おの花やあるも又わりの正花あれ
て花とい貴效の二字よ定りぬ
○
▲正花の出花條の出花正花なる一と先所せられ
は二葉乃欠直武お傳の比子花の初り各り芳
あつち抄のき要格の都は奉て花梅を切く

さう伝古今抄の今将金部の西下を考り正花の
するは花も花用は持りてあつち室玉さあつち
ゆくさうあつちその他の句を待らふのこもて
自白ありあつちおしりもあきさるは正花はの
葉きり花飾り葉のまは花條おの花やうり花
は奉り津正花の中古武の位わあり是を葉被
下りるをさあつちお花梅を待らふとあつち
は故よ十お吾用するあつちの教訓りうら
うしむあつち奉りて去末の言らるるは正花を
持る句の只中の花を花お津種の花梅の葉作は代む
といふ風抄の初り人あつちむうも

△非正花お

花兒花梅赤き花 花事お菊 花君咲花身付
花お花畑花標草花秋花 月乃花流
風花お花お花 花田花を花梅花梅子
浪を花のこ花を花を花のこ花のこ

花のり 灯のむ 大花 咲か 花や ちり 花子

佐治 一花さくら 二毛人山吹 千去

乃や乃ふひうけて花極

花のり 花極とて極とていふんそ一山一繩子わの
花とては寸付むしう一奇の伝と始

新侍てと名根の赤きを伝ぬ

去留はまの花たてて花存を何とて名根と赤き

花のり 花極とて極とていふんそ一山一繩子わの
花とては寸付むしう一奇の伝と始

▲ 花を正花に代するに法て花存を何とて名根と赤き

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

佐吉 花のり 花極とて極とていふんそ一山一繩子わの

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

花とては寸付むしう一奇の伝と始

昔

・妻わたり又えてゆく萩の花 松原

・この枝より花をそそぐはこ 風之

・ふるさとの遠くはむ月夜の舟 後若

・門外の花をあそぶは 柳花 支房

・矢張りうさぎ二月の月の花 ウ中

・栄枯のよき始り花の花 夕市

△非松の花字不姓

・狩友故に秋も寂しく松花を 壺峰

・たのむはるの心もくらく 蓮二

・初より人の心もくらく 方堅

△去正花

花供花法花会式や花 花生は五八二二因

作花紙花候む作花花紙花紙人二二二

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

花の秋花の秋花の秋花の秋花の秋

すくし甲乙あはる月夜引たて宣う寸

△此の月夜は「時花」の月夜とは異なる

又月夜を花夜と云ふは、昔より其のまゝとあり

月も花もあつて、月も花もあつては、行つて

たふして、たふして、のたふし、たふして

あつて、あつて、あつて、あつて、あつて

他甲月夜は、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

ひびき 花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

いせ 花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

△初初花をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

花の影をいふ、花の影をいふ、花の影をいふ

奥

おぼろげな花の通とくちりおぼろげ 巳百

奈

あつむく花の通とくちりおぼろげ 以之

砥

あつむく花の通とくちりおぼろげ 信化

元祿

あつむく花の通とくちりおぼろげ 古蓋

冬

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

月

あつむく花の通とくちりおぼろげ 村女

去

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

全書

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

△同キの栞と花を去

化

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

あつむく花の通とくちりおぼろげ 木白

止るはけはあゝ園傍のわたりけり
花字を入るのよき止るはけはあゝ園傍のわたりけり
花字を入るのよき止るはけはあゝ園傍のわたりけり

△花のたのしみ

春三月は花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し

仙鳥

白雲か都降るり小春の空のむ
花とてまはるけの舞多し

△花のたのしみ

長う 庭の人の娘は
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し
花とてまはるけの舞多し

▲市へ出せしむる時夫人花を舞する人ある付又
 美を待て次之向又次於懐て舞へ去去を圍き
 花を舞はし乃くさあやいひ空を去と去と去との
 あつたのりし猶き付らぬ出はてて花をす
 又二ひ夫人和志ある他は懐る人もある
 せよくあくる時花出を行す花を伴す
 ▲よくあくる時花出はしきあ白あくるさつ
 又あつた時花出はしきあ白あくるさつ
 何方より引上げて懐て懐あめく引上げて懐て懐
 志ははるのりし懐心の会はる花古の懐
 ▲懐心の他は和志又和志の会はる
 又さつ代り花あやいし花をいとさつ人の白あ
 き付あ白あつてさつ代り花をす
 ▲さつ代り花あやいし花をいとさつ人の白あ
 代り花あやいし花をいとさつ人の白あ
 月花は入代り花もさつ又花出は白あつて

去去の付を 花を舞はしきあ白あくるさつ

他はあつて花あやいし花をいとさつ人の白あ

花 花の舞はしきあ白あくるさつ

花の舞はしきあ白あくるさつ

花の舞はしきあ白あくるさつ

花の舞はしきあ白あくるさつ

花の舞はしきあ白あくるさつ

花の舞はしきあ白あくるさつ

花の舞はしきあ白あくるさつ

●花房原海百

修 中々初子世む去の白 季下
花のまゝもシテ ねより 一舟

△峰出を待ぬ花 多者

芙蓉 花とひ来やと 風さうし 菊
牡丹 花より 牡丹丁と 元子 元峯

カシウ七月花入代 何多かれと思ふ

△花若後る風之苦 七ア及者

花若く風を許すは 祝式の心は之 極き昔は是
除く自立さゆるるを 志を世風もの白く
赤実の花を 毎く出さう 春介 待とう 玄神

有笑 ちの ちをさうら 村ののあー 柯山
さくもしは 合掌よる 出る 貝書

村 再くふりやうる 包ぬる 支考
そくくくくくくくくくくく 十丈

難 ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも
ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも
ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも

穂十 ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも
ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも ちも

相房は 移匠いあ 花の幕 入り
花の度 射と守 芸序くらひ 去来
花さうら つれく 草を引出 菊
去うる 風のうらうら 年 糸袖
本丸を 打ちて える 花のを 其結
まん 合おの つく 風 浪化
お枝の 穂を 備へ 神の花 匠者
穂をおろ せよ 風 子

拾 風 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

浪 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

花 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

勻 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

原 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

山 ちの 一 時 菊
去風の時 開き 仕る 外左
ひうんの ち乃 ぬき 陸 秋函
おん ちも 風の 柳 伯楓
かたあ の ちよ せう 花 枝 り書
花さうら 毎下 是 花 花の 美 千川
ちの ちよ ちよ ちよ 去 風 口通

カイ印記 六

捨

夕

浪

花名目録

庵

花名目録

山

ちのむを捨てて月も空際り 桂楫
雲うら車風のうらみも 叩陽
三石の申ふ屋も花さうり 尚白
ハツトより去の吹降る 霜

△風もちむ残る煙 多者

杖風も世を吹残る 蹄声 踏ま

三石より伝守屋の芝草 えま

むの晴ちりて傳くおのき 一吹

△花名目録不苦

お大丁た月も名目録の付と仰くお店の煙か

されどもおまおれ付あけ吉井よままを付

り許さうとえ立あつた吉のよ吉のよ付さう

根を丸を花んこりり のり由

の山橋くくくく 橋 許六

園白のお成のちの暖くり

小倉山前より園よ乙名

白猪のきけちんすすの川 桑邑

辛

月

花

花

花

花

花

花

他の通 花のりきい 木因

約を布不二と吉のさ二玉帯 嘉然

雪をむとふ又ぬむの雪 甚二

吉のくく神も山もて嵐山 由格

雪もあくれむとあくれ 心を

志聖の芳の初自後う け柱

月雪より橋も二玉の縁より 燈え

△一玉二白のむ

月花を捨てて他キの花捨る花 正花橋 花字

右むの内一ツ出れば八百句三テモ外ハセス

賀お花 風おけむ名不分む花を橋の付白

神尺名不表にまおむ 教は茶木のむ

又外は竹のさす花は月ヨリ判をシ

橋まの木のろと花のんを 峯白

三度ふむの橋の山 仙化

おはへ外おま

△同執向の巻妻格

去と枝 花の教室の泊はせたり 口通
 名 入さてあまうきりのむの奥 三羽
 ヤへ ちよほめむ不二の鈴を虫 兼祜
 舞乃まむ芳あうの志がのむ 示右
 花邊 犯心の山使あれい 笠の花 布胡
 きたきこえぬとあまう壬寅む 巴弓
 拾 大傍う花うう 傍の人未す 菊
 尺 ちちちちい妻事その産撞て ソラ
 かも 法下い初ていさる 火うの花 路笑
 琴 ちい未界うい 辨て 畑の花 东古
 柳 山門は大木の花 咲くはれ 百哲
 岫 ちさけい山の奥と一 娘ひて 呂杯
 天向 さけい高さうぬえうも花のや 衣朝
 咲 傍草よりうひく 笠の花吹て 船曲
 笠 ちりされて 傍のむ又の 西貴月 尺新
 え 花ちをむえ 秋の竹 没 り紅
 一白の風伝あめ付れ 果あすてい 皮てせぬとて

まもけあういんあういんあういんあういんあういん

△雅花変格

根中 古林のセグき 花血を花 傳風
 花旦柳樹をもちる 窓うそむ生れよそ一 結う
 花血を花と押されい 泣あう 去を 続くへきさる句
 二花のまあるあう 舞う 仍うい
 一度あううの 二花もあうい 小枝
 自今 まいむ杖いおまうとせれいも 支考
 胞ぬまのいい 互教くうい 伝音
 拾んてうう寸 ちもさきし 欠音
 七きい いせの梅白子の 不引花 咲て 凍ト
 拾んてうう寸 ちもさきし 欠音
 鏡火よ 割て 影 移す寸 常久
 舎新 花の去月の 林さる 世を 尋 仲二
 我込れて 珠 散う 光るい 尺答

鳥山

よーゆーく末てきくぬ山椒 麓南
娘はも世九生のまき花 天香
大さのちひあつてもあつても

是は正き花を作して物なり 花は
花んちよりほあれも物なり 妻格あれは母より
但月花をばねふあつても白の物なり

今 作花母乃きりむを何て 山
物じい物のおあれも大方まを添えり
本物 糸糸のむも物なり 遠り 遠
口はたあまふあつても物なり ちあつても

かみさの殺は花よりなる
物なり 物なり 物なり 物なり
八のさう月花をける時土白の花を及
くくさつてもまきと隣りあつても
物なり 物なり 物なり 物なり
花はちも物なり 物なり 物なり 物なり

やく門の又き花なり

△此は昔世の月花は花のキ移りまはせは
キ移りありはるる何と物なり 季節
物なり 又物なり 物なり 物なり
△此は昔世の月花は花のキ移りまはせは
物なり 物なり 物なり 物なり
△此は昔世の月花は花のキ移りまはせは
物なり 物なり 物なり 物なり

△花は物なり 物なり

△此は昔世の月花は花のキ移りまはせは
物なり 物なり 物なり 物なり
△此は昔世の月花は花のキ移りまはせは
物なり 物なり 物なり 物なり
△此は昔世の月花は花のキ移りまはせは
物なり 物なり 物なり 物なり

本朝の許さぬ理なり若宮たは本朝出ぬ
中及さるも又次は花をせし草紙の苦うりし

△梅を止るべきも資格

三度ふむの梅より山の山に祀

三度と志の心と詠解ありし只その身も所

さげ降つたきりきめくと控事の世を歎く付

あり故く梅よりけりしなり

△去末むと梅よりむととと菊日ぬいさ末日

凡そ梅よりありしと一箇にするありし中

早きむと梅とのりすし菊日されし古人の

思の内に中梅よりけりしなりけりありし

されと為なる梅よりけりしなりけりありし

と此下りけりしなりけりしなりけりありし

△菊日けりしなり梅のりしと菊日けりしなり

先きの口決りしなり梅のりしと菊日けりしなり

志ありしなり梅のりしと菊日けりしなり

形ありしなり梅のりしと菊日けりしなり

さおきなり梅のりしと菊日けりしなり

△菊日けりしなり梅のりしと菊日けりしなり

さしなり梅のりしと菊日けりしなり

△菊日けりしなり梅のりしと菊日けりしなり

さしなり梅のりしと菊日けりしなり

△菊日けりしなり梅のりしと菊日けりしなり

さしなり梅のりしと菊日けりしなり

△菊日けりしなり梅のりしと菊日けりしなり

▲定座を梅ありて付の手柄あきふりて一白
も階しく仕立あり梅はより花あり心は花
を引上りて寺定座ありて又寺に於て之
定座に付ての無つらう下は奉り此何のより
花を座よりよき白出木をたきむ
▲又座より白の花に中あれカ仙の白三ア一乃
白ありて一寺より一寺一寺の多しされり
面の窓のれは是二寺と中古已末定れり梅は
初ねちの花ありて名にすきむありて
より白ありてさるる花ありて梅の傍に立
て梅より併されり
▲己の梅ちよき梅ありて怪て我れも定座より
をとり初ねちのむ花ありてむの多し梅は
又さるる又梅よりさるる梅ありてさるる
や又カ仙と一おありて白の梅よりさるる
つしされり

▲本梅正花を用名が式白花は正花ありて寺
▲只連寺小山平白才九初人付て梅は
傍りてさるるむ花ありて又さるるさるる
さるるの傍りてさるる
梅は 乃ちさるるさるる梅は花 木因
小文 花屋より梅は梅は候出て 養浩
秋首 梅花さけの世より一梅より水甫
花屋 梅よりさるる梅の仲り枝 僧依
は花梅ありて射しむと竹よりさるる梅は
さるる梅よりさるる梅は梅は梅は梅は
▲我國のき山梅候より
▲五座より梅ありて牡丹はと名の一
白の梅はを力より今花之の事あり梅は花
をとりて我國の梅は梅はさるる梅は梅は
花屋より梅は梅は梅は梅は梅は梅は

用ふ所は、し 殆どくされども是を再々和あむ
白 目とよみ梅は伴連の降るる
人 入ねもす尾上のまゝも
 五五といふ山の三處とて一私考に数々極題より
 五カ一の是でよ花を極せり極るよけきむなす
 五ては伴連といふ梅は花は泣かれと定まらざる
 五つたむよ梅はあつたむあつたむむと合
 五れは其梅の極むをすきと定まらざる其度
 五決せり他度上の二字は江戸の舞の意を極せり
 五三二度一處の括られ再するもあつたは他花
 五を分むる多神あり但是もむを合せりと定まら
 五るは其終止正花より定まら他花も極む
 五れよきる例ありあつた極むを分ると定まらざる
 五か表のむも正花めれあつた極むを分ると定まら
 五る一扱て其極の極る古例より定まら後已
 五ら分むるはしを分ると定まら

本意古より花は梅を分むる傳授あり初ん
 五は許きたる梅類の極るあつたの花はあつた
 五梅ありあつたつては但是も梅はあつた梅は
 五あつたあつたつてはあつた梅の傳授はあつた
 五ウ 幸傍乃松花より梅より 翁
 五山も梅を志あり去 而 千那
 五傳曰き梅も其世の人より梅とあつたひの言根の
 五むと定むるはと定むる梅より幸傍の松より
 五梅より面白むと梅の詞を分ると決まらば
 五白の梅は梅の極むはあつた梅の極むはあつた
 五昔あつたの山梅はあつた梅の極むはあつた
 五を分ると幸傍の松を花より分ると山より
 五梅の極むはあつた梅の極むはあつた
 五本意の梅は梅の極むはあつた梅の極むはあつた
 五又分むるは梅の極むはあつた梅の極むはあつた

・控

楊山

山伏の山とつるや山 楊 許云
そと金もよし 世むの比 去考

三平

楊さくやあや牛の白さく 西を
やすしむの多し小袖も 甚二

采

楊をさあち市の麻川 竹翁
大和路くつるとそとむむ 嵐号

□本草賦不嫌 古三三

一は梅

浪と花入りの中より 信兼
やと一隊 楊柳意 。

古捨

葉やみの家まき丁鳴て 花
は舟あれに 信丁を 去院

志栗

物まわぬ傍に安き草庵 翁
時と山ささる人十さす 兼
笹竹のそとらと庭上あて 意
通ともあふふの草川 石雲

雪丸

他社と云く花の意入 翁
み木とえまき梅のひとせ ソフ

花

草むくは性まをる夕まき 凡犯
及のまらるより打中守 翁
及心の登る花のさむむ 去末

草川

又案の中もまきまき葉 林陰
供人の門まきや夕月お 理業
お葉おとと笛のや中も 和文

水仙

竹よりの所の花の白 ヤハ
髪合合も及まきむえで 翁白
へかたよある雪の山吹 杏石

六行

肩衣にれの中の花乃去 藍水
まきおのり 楊の水号 佛松

加川

咳乱す梅のお例の葉控柳 一楓
夕日さす花の西谷東谷 素川
あま白燈の何呼子号 彼酒
山吹の楊柳の 翁 燈 杯舟

カイ印

・控

木部 二五

古六三

行

冬

月ハ匡クニ牡丹盗人 杜玉

秋

秋ハ木末ニハむ松ノ声 午リ

一穂

松ノ山嵐ヲ中ニハコトニハ 冠那

種

木犀ノ白ハコトニハ 佐角

狭

乃解ニ木ハ小ニハコトニハ 湖十

栽

神木ノ根ヲ花ノ為奈存 行々

梅

起テサハキニ松ノ白ニハ 費仙

梅

以法ニハコトニハコトニハ 庶叔

梅

鴻雁ハコトニハコトニハ 有琴

梅

舟ハコトニハコトニハ 七五

梅

三十三ニハコトニハ 佐幸

化

以ハ秋ニハコトニハコトニハ 佐幸

冬 梅 栽 狭 種 一穂 秋 冬

木部 二六

古六三

行

冬

止平

梅

角ハコトニハコトニハ

梅

水

梅

一ハコトニハコトニハ

梅

入山ノ炭ニハコトニハ

印

甲ハコトニハコトニハ

化

忍ハコトニハコトニハ

梅

おハコトニハコトニハ

梅

一ハコトニハコトニハ

梅

草ノ属ニハコトニハ

カイ印

五

苗代青田の松は属して種は梅川木に懸る
 ろう茶の枕は振伴葉の戸に居ぬ御新衣の属
 へ又木の属まの伐刻におも新衣を果然と
 食わさ人様を怪名おの生れまれの字美も
 相討桐の宮梅の木村の松に地名阿松栄極は栄る
 君不部入る松の御林の使生をん修り
 木葉の生えさふくみ松の樹村群叢も同文も
 木の生えさふくみ松の樹村群叢も同文も
 但竹葉松林松杜は勿は極おん花松葉の
 おん切も極おん松葉の花を極おん仍
 同仍ささく○南國は竹子木子と云ふ
 事をも極おんあやもささく

一寸あり二上山や葉の花
 小枝
 枝
 きのりの松葉をささく西風
 御角
 一子
 熊鷹の子をささく月の出
 十丈
 必とささく休む茶取
 千川

ヒナ
 びまのより子ささくの松
 翁
 真
 陸のヤムの又苗代
 松糸
 をよくと松は丸をささくれ
 り地
 旬
 腰に使て
 禊
 はん云
 草
 此の島を一枚おて草花
 徐子
 ね白やるさむ松の日
 金尊
 後者
 小畑まじりささく山は作む
 キ風
 州の戸乃乃をほきす押れ
 翁
 草の裏下あささすささくれ
 方風
 次旬
 秋のヤム
 是は松
 キ角
 卯
 不死人松の糸布をすさくれ
 翁
 草の月観の松をささくれ
 嵐を
 松の松の先下をさくれ
 松水
 松の松の松をさくれ
 何松
 松の松の松をさくれ
 何松
 松の松の松をさくれ
 何松

カキ 出代も高松考の考を以て 甚二
文操 雲いさひしき 赤の杖 方壁

菅 明きよし清く修く梅の宮 正祿
類のうらむの一子お侍 二

西花 夕月よきそ面白く土産の松 竿水
秋候くく板の意隠 万水

栞 梅の木の葉を賞い一芝 吐き
門松を賞納ても美め守 朱角

夕 母を恵よくく山ちの悦 独笑
月や虫花の浅乃水吞て 助豊

栞 冬きりく冬色白く梅を七 喜吹
山笠よ高ちる四郎の風俗 柳士

草川 衣配松のふ乃煮うれて 林房
下舞いむとささく梅を 浪化
紙衣の袴い角おりの拍 小枝

次 日本橋は淨部の夜を海入て 百子
秋盛松風の香をお園に 柳水

栞 舟の周すけて歌を討てく キ角
海邊よは木の屑栞戸 才丸

葉 萩の竿を揺るる 月 梅香
燈籠の夕へを杖のらき 更也

ヤフ 了るまねり言藪の下 ソフ
露のあり日いつとる 玉三

さき 翔よりも豆鼓はあきむん 菊秋
ささくれ山の杜乃三月 香白

林 林乃中の萩い大さく 乙由
花の今早の夫よ吸い梅 更考

栞 新百句乃 柳屋 香
△月の桂月のむ水極お 佳林

丹 空をうけ何ぞ三五の桂丹 素沙
さあきくは杖独るすて 夜
そあさくは合息あきくは極 夜

星月

新夷人の呼ぶ星月は青葉を
葉の名代、葉はあけり
ねらう桂のうけの星月
ひきよひやむの桂の葉の星月

十七

星月の星月、おとりの星月
星月の星月、おとりの星月
星月の星月、おとりの星月

林

星月の星月、おとりの星月
星月の星月、おとりの星月
星月の星月、おとりの星月

非

△本草字各云云
おとりの星月、おとりの星月
おとりの星月、おとりの星月

了

板木の葉、おとりの星月
板木の葉、おとりの星月
板木の葉、おとりの星月

凡

板木の葉、おとりの星月
板木の葉、おとりの星月
板木の葉、おとりの星月

次句

尺幅

本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月

花

本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月

抄

本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月

和

本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月

一

△松竹 雲
本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月

志

本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月
本草の星月、おとりの星月

松竹の根又草上下に生じて 慶州

世後木や世後松の根は名を以て 子角

八条も九条も松の根は名を以て 山人

松こそ声の音は夕月 未因

初花の根は古竹枯とて 一花

二三の竹切られぬ人よりと 支考

あざれて雪のうらうらと 山店

あざれて雪のうらうらと 嵐竹

さす竹の枝の音も老の口さ 昔種

松竹の僧とてくくる竹 風麦

松竹の根はあり草の根は何れ 子角

慶州

山人

未因

支考

山店

昔種

風麦

子角

子角

子角

子角

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

松竹

葛のほろの白又草の根は白み 昌美

△苗根菜云 根松苗竹松乃あり声 出子

苗代とゆゑる去まうと 嵐雪

ちのむは根根とてうらうら 嵐雪

長門より西の山乃根向と 嵐雪

根を分て牡丹と移す石の男 柳見

梅は松きりの根ある柳 已應

△松実種云 松はちく寸芥子菜の根 比非

△松実種云 松はちく寸芥子菜の根 比非

△松実種云 松はちく寸芥子菜の根 比非

△松実種云 松はちく寸芥子菜の根 比非

一橋

種すく人の為。斤亦。信州。夕良の種とるはふらり。

△黄。采。面。去。

席も寸さかして蓋の石丁。白。鹿。

柘の皮をそくて。鳥。張。羊。

残。意。

目。よ。い。件。せ。う。き。木。の。お。破。笠。采の戸。は。け。推。た。き。ら。む。キ。角。

△柘。は。木。面。去。

△柘。柘。も。花。と。紅。紫。の。面。去。て。尺。一。あ。う。

△柘。白。は。され。も。さ。り。き。り。て。理。之。

△一。き。一。白。の。柘。柘。白。あ。も。り。

柳。若。枝。若。葉。一。枝。一。枝。白。見。白。一。枝。白。一。

柘。若。葉。化。名。葉。白。一。枝。白。一。枝。白。一。

山吹。白。花。モ。若。葉。モ。葉。子。花。白。花。名。ニ。カ。ヘ。テ。モ。

牡丹。冬。は。花。名。モ。夏。は。葉。名。モ。名。ア。ハ。お。ニ。テ。モ。

菓。イ。名。ニ。カ。ヘ。テ。モ。芭。蕉。草。水。仙。

菓。右の枝イ名は他キコウとも同おきれは

コニ決て寺又ニニ字合る名は柘を

△菓柘そ一甚ニ極おれ去。カ。仙。母。中。

柘。一。柳。若。枝。白。一。菓。若。枝。白。一。

菓。は。教。一。字。の。柘。菓。柘。菓。表。の。教。あ。れ。も。

其名を更候は二。三。二。ツ。許。セ。リ。

△古。武。一。甚。を。二。度。上。間。の。付。二。度。一。日。極。お。せ。二。ツ。

件。せ。り。極。つ。も。一。度。一。日。一。甚。の。み。う。そ。る。白。も。

カ。仙。も。一。一。甚。を。二。度。上。間。の。付。二。度。一。日。極。お。せ。二。ツ。

れ。て。古。武。一。甚。を。二。度。上。間。の。付。二。度。一。日。極。お。せ。二。ツ。

下。も。う。て。二。も。一。日。も。許。せ。る。故。也。

柘。上。之。り。さ。う。や。柘。

ハ。柘。乃。真。柘。名。柘。

ア。ち。果。て。柘。月。の。名。柘。中。

ハ。手。名。の。名。柘。柘。毛。其。由。

一。柘。を。て。菓。も。柘。も。柘。の。名。其。由。

加。川。カ。イ。印。也。

世考

八加乃川のあはれ書柳 枝羽

朝日

ハ梅を蓋乃度と死 糸 帆去

浪

ハ早炊の梅の想のおまこし 糸

六

ハアアのあれこぼくま梅 山を

六

ハ梅も梅のおまこしてア 去来

暮

ア喜えようおまこしうききる 似去

後

アあと梅枝のうのうのう 去来

後

イ一梅残る そのあふき 亦七

□吳生歌数不姓

寛治元年只日用の世を一人の人和を扱ひ
おまこしうのお枝まききくき年ありとも
夏日の時宜やと又治すア
梅を西うう人そ急きヤハ
あの花のあはれこぼくま梅

柳

梅月の上は色くの枝 八

白羽

大をおまこしお小梅 柳王

白羽

吸おい後うると人の梅上て 柳王

白羽

伏又の丁を二世うきく 由之

白羽

是れ又山をの尾乃去後 秀工

白羽

惜てもうぬちの渡合 丸梅

白羽

支も猫の碑と何あり 聖梅

白羽

松上果とちり梅鳥の天 葉梅

白羽

依世の空死を後の人 一晶

白羽

る碑と教を長る夫風 三花

白羽

△同生歌二去 貞去

カイ印

六二

白羽

年誦く梅の書く時を 糸

白羽

我の心と梅の心と 糸

白羽

鷹の爪と梅の爪と 糸

白羽

梅の心と梅の心と 糸

白羽

梅の心と梅の心と 糸

同生

山

精進の房々りる下の声 杖房
出てゆくまをたむこも 巴弓

市

小舟の燈来て休むほほ 海圭
夕さき砂よふ 障良

去

あふりり 山犬の 声 翁
籠の身を袴痛く矢を別て 釣房

去

杖上て杖あてられぬ大の声 松通
月も今宵と又むるの市 三翁

市

追ひの網を籠のあふり 素年
ま杖投ておろす年の為 支考

枯

声もあふり麻乃小葉をむ 神叔
まあふり 年よりの声 久我

ア

あ老妻のそりき熱もあふり 之乃
松のそりや 二尺 陰 独

に

まきさる 由よりたせ切親 庫月
たしみの田舎者のそりき 多者

△同生れ対句

仙家

山荘の枿桿は尻うけ 俊徳

初

花はのうらを臨渡寸き 呂九
力を機のおあうとまやまひ 三羽

辰

白雲のそり面白き利理組 何由

准

舟も黄之に防風ね 季
巾巾のよありあふり格うて 嵐雪

△つ子教生教 綱は柔き杖不煙

園のつ子の櫛をちるあふり極おこ二白去とや
いふあるまの星もやはさういせぬよ二白さほ
綱は柔きを二白さる何く

△コハ古式を難すとてそりて一巻在るよとさる
あふりたあきるあふり支考扱の傍こそあふり

天

山の薬山子をそり苗代 芳路
花ちり林匠の時えあふりきて 葉路
梅こささるぬ号乃 由 季

カイ印尺

三三

皮

さきものうきりを抄寸桐のて 涼ト
月の篋乃きんさんさとおろて
アノ後うつ子由一葉新 口お

△非せお同件せれは不睡

流せれ只「雷」の怪お水を扱一魚を「物」の奇然
「皮」の病名「支」狩彫おせれ「木」お掘り
名不名材のせれ名「皮」を「木」に

雷

ウエの先アア雷の声 楚并
アもあううぬ山陰乃乃乃 車睡
さを麻の蓋箱矢を袖に射射を 翁

三

お衣木のるる持る花の山 而り
采る者も「門」の喜人 鼠雷

其

感して「鬼」の持をつく妻の面 牛角
用アアせて雷 射如一 何容

鬼

神の射持乃矢の根尋る 化即
心アある合息て丑乃時系 和淋

コ

陰アアてき正つて心おる 三拍

指

古格

只今の布の皮の味危 美危
川陰の杭木や射の傳やむ 似美
とやくと量下の後、熟泡て カ号

拾

誰やうや出守 念佛 妖人
思入の戸を叩くて扱はそれ ヤ水

ヤ

を付中アアるの瓜打 示右
ヤハ「木」の根を「皮」に異せて 音水

支

皮乃鳥の人喰アア 翁
一「木」の皮分は「皮」に月陰て 工山

工

きりの車上は「皮」を去つて 車者
ア「皮」の既乃「皮」に「皮」を 有架

天

藤乃「木」の根ぬ指は「皮」に第 幸平
髪乃「木」の根ぬ指は「皮」に第 鷹仙

天

猫宮れて後せ 一人 山只

哥

栗坂のさうあつてき夕月お 胡仲
狐仲乃のそめく入 凡草

脚

靴より靴をい猫の二ん 杯舟
皮の裁きい砂い常月 灸灸
字も屋を引く月狐川 里可

かく作意をけりも生れあ守

杵

木匠又の板屋の外も同赤 吐志
三上より後一月の明 後 漢苑
粟山子の弓へ一も合長 秋敏

村

了士も洞ま布して立ふ 小枝
木子の黒乃 沢あき花 世角
木跡部中へ被るる路の群 十丈

美せお枝の例へ夥りれと書す

△多字三去 古い面云

拾

めきくといより定き智の声 世形
むのまよりぬ小者の袋群の 三羽
庭名力白き人よりとせたり 午符

例

古くくと短く小者のおとされて 例
大おのちも隠しや合衣を 方丸

浪

水名の例の板竹立止り 牛角
人の噂より名乃 勢り 八字
風乃あふ日も尾長智と 一南

倉

又洞名め 寄りく石 田入
又板いさりり 株は屋を 宰地

橋

△虫掛字三去 古い面云
色も五色なり 世のむり 橋支
乱れ 勢りむり 仲志

皮

△了より上世 古い面云
月は尺寸す 子の舞 撤士
了人よりる 虎の市 立 社免

勾

了りもあわて 若きとらふ 里由
後先はたんと 通る十 采之
了字の明とおおりの 五字 陸敏

極

高を対うあ 痛のり 右範
山高をさ 落れよる 士の欣 字路
依滴るよ 赤の子 恨あきり 新古

初

〆 西去
 ありき〆〆の上より右側
 〆〆〆〆と橋を又てあり
 〆〆〆〆の川より大さく
 〆〆〆〆の川より大さく
 〆〆〆〆の川より大さく
 〆〆〆〆の川より大さく
 〆〆〆〆の川より大さく
 〆〆〆〆の川より大さく
 〆〆〆〆の川より大さく
 〆〆〆〆の川より大さく

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆
 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆
 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆
 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆
 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆
 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆
 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆
 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

カノ印記

魚

△校おま

あつらひのしほ校持きやぬ 高白

難

一羽鳴ても校忙い仕まぐぬ 山

櫻

紙忙もつす残る校の声 校をふすくして出る裸刃 おむ

櫻

△奥。校おま

あ

杖の水番。校を引上げて 儉校 校まどれて校丸やき

櫻

△貝校おま

月と干しる博貝の校 如風 幸際表の油味く 如風 已上の生れ 取合ていカ仙は十もより又色校 せうり出でお生のおぬまもあり之世あ

考あれい字の魚のようじ熟おこれい校 あくお柄のさくすく大あひく

△二巻二句のせられ

号 カホキ果キカホヨ、 喚子色 カゴ、同おまハ艾内一

草 テムレ 校 トシモ 校 レテノ田長 不ぬぬ校キ

水 イナホモ 尾タキ 志木校 鶺鴒 三六ケリ一をむハ文字一 蝨 トレテモ

松 又狐狸 鬼席 新 雷天 狗 校

△盛衰を二巻二の生れおま

号 冬去角一 号 冬去角一 号 冬去角一 号 冬去角一

二ツを許せり

化あぬ 久残の厂も一さう也く 校ま

化家ア下よちりよ阿房友達 翁
ハガ去入陽の相帯の下 字
一書名
アお衣と笑ふ初丁の声 佐幸
ハ天法下借令あて陽り 翁
已上八百句ノ例已下ハカ仙ノ例

下ノ名ノ事来ておる 押明
抱込て松山度きお明り 支考
ちんりるの仮初りり 明
おの月表したまを共いり 汎牛
二百とも月表のはちあれと作吳あやう

多却
ナ川 激とまると年突の献立 莫在
ハ志ましく小あやあまふ小之川
同作あれも 献立こまのまあやう許り

海印録に終

貞享式海印録五 曲寄 述

填字同川紙不嫌

麦三於麻のお杖よ海おの麻子のときい是を吳
伴のほおとらして物事い仮名名の記を志也し
吉云より仮字を痛束るおわれ今い候よりて
考るは仮字も本美も痛らわおあや九二其
大梨茶とわくま名仮名の世方も及まぬ
かか多 カツホくは声ニ号タリ 貞早ハ仮字
やふ入 ヤリヒヤトハ飛ヒ 書又蘇ハ仮字
さをとめ 秘妙女心 平ハ仮字乙ハカ子連
たおえさ 棚機く昔衣花女ノ通林セウハ美洲
い糸おを考 否沼ニ三神也合玉フは白指貞ハ仮
あの内そ 莫告及之 神は藤ハ美
志のめ 藤考ホト明白は口之来セハ美
志をり 志ハ助字 枝ハ仮字之

吟宅約 踏踏草 月八夜字十七日折枝王不苦
 ついふつこつとせうし 月を那冥へ 柳晦日八美
 はお柳き契件わす 裁不燭わありたよ
 あつら 何を推てる通せよ

山多

を大さかちせしおしのみ書 栗儿
 我ちとわを八るかき清くして 舟相

時折

後夜のちゑんかおおきささ 太龍

皮

福山の霞の追付ひたりあお 卷中

相伝さるるの啓教すく 支考
 つきりあふ乃びて枝き程はま 乙押

対

長きあはれて時敷の目も忘れ 加枝
 藤のむくうさ狐届る 十丈

うの中乃隙きも高き音なり 牧童

形

何き後し世む形し 卯七

百仙

云て来りし枝の憂のすいふ 素行
 月を托りて雲のお合一介

形しを千代の始や柔のむ 昨十口

キキ

中くむくうはるむ之猷 伯老
 月を重て及波の風吹て 甚二

翁

一お柳の雨をききしつゝまきか 口力
 爲ていゝゝとあき書先 估ホ

有

ぞうとら馬波に余程るあて 乙抄

柳十

与と牛と中々よんやう 柳替

中

極るる五町を及乃田社版 柳光
 中人乃口字かをもうそ 伯楓

星月

木波の月と尻目と初の雨 泉石
 三落のあちの枯やうす 目松田

目

将書の役目と美まうそまき 而后

金勢

口あきさか 猪豹 山夕

口

関れとまの意はくもや 仙芝

コム

竹布を捨るむの山口 青嶽

牛

毎成道の提は流る版時 汗六

孫秋は仲費さつて風吹て
 ひんせうたぬ色えの連代尻

尺目

半

夕

休

舛、松もまのたき足 尺友
 糖りもぬぐり夜さき序 里夕
 捨手序と尺子小屏風 似翠
 独りててせ約る 一言版子 号那
 笠りもとて十の世のう枯 栗杖
 柄は出て初版や十のむの時 有
 □同字ありは不嫌
 又云世分の打残さきうといふ教は世考訓の
 又云といつて枕草の生葉の字形と心は
 ▲考訓の初後信他引倍よくもくもイ作は紙
 を種とぬるり澄白より世考を分るよ及ぬ
 るい大小木木の世考方さき字うと志る
 丁も大りし届也く又 原空
 蜀作の袋似やうく水後 快子
 大糸の紐をア久くき 三福
 秋されは袋は喜たの太靴楯 鼓士

タクイ

言白

タシ

張光

サ

尺帛

タ

桐山

木

皮

キ

カク

後の雨の後のあす(り) 番粒
 大毒の反説書を花乃をも 夫角
 大子さよさよ後一年 倍比誰
 お休さきさきある信を 以之
 おねとくつ大休のり 丸把
 約束の小者一控さき来て 百荒
 十のむりのよきと出り 月夜
 世のたよお終部を面白き 枯木
 又持ねさき曲のりさ 五吹
 拾のさねく詰れ初の日 嵐者
 秀拾はきも世考のる 麻
 おとあつ木のも風ちる 板む
 狸者の楽を今息 林子
 柳木木も仏とすい 皮考
 推の木は通測る 角田川 牛最
 あらさぬあさ母さお文 佐少
 所不もさよといふさ 桑常

拾 杉 木 杵 臼
 杉 木の 葉の ぼろ ぼろ した 山 吹 雪
 木 杵の 杖を 立てる 山 吹 雪
 臼 水の 付 宿屋も 足さ ずして
 杵 礼を お祈り する 人々 あり
 臼 木 杵に 昇れ 元も 居なく
 臼 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 臼 お祈り する 人々の 声 あり
 臼 人の 噂を 木 杵の 上 あり
 臼 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 臼 風は 紙 楯の 裏に 吹く
 臼 早い 出て 来る 杖の 影 あり
 臼 七つ 上 木の 葉を 木の 葉
 臼 ちんちん 落ち 杖の 影 あり
 臼 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け

天 杉 木 杵 臼
 天 杖の 天 服 通る 人 あり
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け
 天 杖に 付ぬ 力を 木 杵に 懸け

カイ印五

むづ 雲の乞すう 山火の声 宿
寝泊ら火所寸橋裏の舟 引水
化 中島の内ておきや書む
多 吾をすうき 洞乃 澤
上 山傳いの上の舟の手りて 正秀
た 小舟おくるの神佐の上 昌房
十 月とて俵紙幣捨帛紗 千角
正 窟居て表の位ひのきさし 嵐老
芭 盤洞古き 移の松 口 宗福
口 八幡の町も多なる水 口 子光
炭 脊中へのありて子をさかえける 松山
セ 脊戸へ出らぬ山へ由く及 徳水
吾又 お備も爲る 祇豆うん入 引
帛 挿入てやうと 俵へ西川や 善三
一は篇 吉原天女も是迄の月 三瓶
天 窟居エらるき 天空のきぬ 信孝
我百 夕の声乃 四や天月 支考

、 ありつゝの音のそとを云天也 庵庵
ムウ 晴嵐の花のまぢりく大世口 井風
大 不ろんて声をそて大文字 素秋
一は篇 誠不嬌笛字 多仍者
め、れ ぬくもきもあり、あつ、れ
り、つ、れむらむむうらむらめ
△りる三途川 多仍者
一は篇 影のな目ま、八月より 三瓶
り垂 師者の谷をよ是合あり 孝
砂 影子抑うりやちひひり 信
極来てよき居ちをれやう 洞舟
又、くき、あ、得世へはり 去来
乃ちあき相の地の花さきり 文州
白き親に取つた村に暮る 多瓶
原の火氣翹を 別り 角
辨、凍筋の狗を別れり 九

カイ印五 五

不苦道りさく

索

三

何楓や、泉声、やの
おのの出た、ふし勝るる
あつちめ、何山、出の
おの、おの、おの、及う、
遠く、子、い、目、を、む、
借、急、な、加、の、性、を、付、也、
裕、洗、て、葉、ふ、い、い、笠
え、え、と、と、何、も、も、悲、り
笑、て、す、ん、ん、及、お、の、れ
お、遊、き、る、ち、う、ち、の、時、と、
加、や、何、甘、く、は、れ、て、哀、あり、
お、祈、の、作、り、持、入、の、月、
高、の、喜、勢、人、の、下、を、か、ひ、う、
田、丁、持、こ、麻、い、れ、て、笑、
お、敬、の、お、せ、白、く、と、り、ま、り、
古、き、尺、是、こ、か、ち、人、備、う、
月、又、こ、頭、博、の、急、務、り、

但

三

後水
枕支
枕後
宿化
小枝
林石
句書
枝
投書
社教
龍書
キ角
小我
林書
再書

三

句兒

三

に、季、を、推、出、し、林、也、と、る、
鵜、籠、の、口、押、明、て、押、さ、り、
来、る、人、あ、と、女、を、と、る、
舟、半、分、何、ま、の、屋、居、は、切、り、
ま、ま、と、持、を、持、て、ち、る、
ひ、ろ、そ、う、と、お、ま、の、月、の、ま、い、返、
博、の、下、乃、先、り、あ、る、
八、羽、の、月、代、村、と、い、し、む、
山、の、鹿、七、の、角、力、勝、り、
秋、博、の、あ、つ、ち、め、あ、く、時、を、
す、ん、ん、と、る、を、引、起、り、
ち、ん、ん、ひ、く、ま、の、性、持、こ、つ、
立、居、ま、あ、る、お、の、流、飛、け、
目、を、照、あ、く、と、敷、を、つ、く、
程、て、あ、い、う、山、路、を、中、に、つ、ま、
林、の、中、乃、家、と、大、き、く、

ヤへ

三

示右
一林
去
林
史邦
山店
竹
郡
店
竹
支考
及止
及朱
固友
乙由

小文

三

△
ち、ん、ん、ひ、く、ま、の、性、持、こ、つ、
立、居、ま、あ、る、お、の、流、飛、け、
目、を、照、あ、く、と、敷、を、つ、く、
程、て、あ、い、う、山、路、を、中、に、つ、ま、
林、の、中、乃、家、と、大、き、く、

三

三

秋百

三

乙由

其の縁の奥をいつき ト不
 家行ゆ方の星をむへく カ号
 りの妹の眉をよもき ヤ水
 其の星を眉の傍を打取き 夢子
 皆こもちを鳴く寸むし 乙折
 弓と矢をまといふを跨き 松石
 文の先三史又遣字也 口通
 産深押やるその精持 遊刀
 押くを糸を繰るえちり 昌房
 ぬく 扱糸を糸をのめり 午郎
 ちぬ糸をいふまきりのむ 吟中
 うまきうし郎の晒をまきり 蒲屋
 さらくと奈漢の板を喰住む 支店
 口上きて 返す あり業 〃
 氏押の糸を巻く候持ひ 〃
 肘る山崎 今をまき 〃
 世作のまきりと巻く候あて 箱

其の縁の奥をいつき 角
 其の星を眉の傍を打取き 周持
 りの妹の眉をよもき 才吹
 其の星を眉の傍を打取き 山家
 皆こもちを鳴く寸むし 箱
 弓と矢をまといふを跨き 考
 文の先三史又遣字也 〃
 産深押やるその精持 〃
 押くを糸を繰るえちり 〃
 ぬく 扱糸を糸をのめり 〃
 ちぬ糸をいふまきりのむ 〃
 うまきうし郎の晒をまきり 〃
 さらくと奈漢の板を喰住む 〃
 口上きて 返す あり業 〃
 氏押の糸を巻く候持ひ 〃
 肘る山崎 今をまき 〃
 世作のまきりと巻く候あて 〃

枯 竹 白 舟 其 帝 月 日 月 日 月 日 月 日

夜を擗る月の小くりき
 月影のしほをぬの雲の
 まく月の影をぬの雲の
 如きめてそ秋を人床一
 きと夜をく入おをつく
 叶るくわいおききの黄き
 下子わをきすれいふくも
 廿房の只 家のそを家
 実ある知れくしとすも
 念仏上戸のわをも愛も
 白川ときより白 檜垣
 林のりへそとく投せも
 △ありありとれれむらむ
 籠工かしの声いすあり
 葉て月を屋あき川柳
 月影は危根く村を杖ある
 月の中をく又やり勝ある

相葉 霜 舟 月 日 月 日 月 日 月 日 月 日

竹 白 舟 其 帝 月 日 月 日 月 日 月 日

夜ふも亦河東の心きく
 表のきりさきせあり
 為てし枯きくそ昔られ
 綱代の船を市の念
 舟の形ふよるやうなり
 和衣をきくし力も言れ
 舞席で舞つ舟を運る
 けす舟の隈ありれ
 燈臺の燈をひく海くれ
 竹のわを又喰う
 勇士の旗去りて芝ふれ
 月下の田町やきうまむ
 浪海と又ゆり
 忽と首つさうく
 鹿や花乃 船をせむ
 孫は医者の逢ふを待てわ
 桑をんありと又徳て

相葉 霜 舟 月 日 月 日 月 日 月 日 月 日 月 日

カイ印五 八

花

梅種よくわいとこは... 花... 川底切てき... 猪草所何も...

次句

△て笛は不埒カ... 花の木や梅も... 花のはは水...

去

又まの林や... 燭臺のちんき... 名もと地下...

久

横阪の別る... 朝の霞屋... 冬のも葉山...

風

唐のち守仏... 月守も梅は...

白

白柳... 使との件... 葉てそ...

こ

てるい多用... 七不出る... 倍表紙...

拾

△は笛三... カ... 七...

長

下んは... ちり巾の中... 山とん...

焼

店を... ちちも... 宮宮の...

祀

祀... 宮宮の...

子

カキ

△ありあけ 七下及多音 〇
第木いあぬよせてあつこ 箱
衣きて旅するんあつこ

箱

権のいあつ 社通の口力
土筆まの 利の権の 占ホ

申

裸て居つてうまきりく 昨高
あつのうまりの面白きと 原

白

はの競は 麻を拾ふと 許六
立込ても 庄者ちくく ヤハ

音

左玉一也けい 存んちりく 柳河
箱も店へ出るととりく 依水

後橋

車障子よりむすのんく 徳之
今云ふそちの子を連く 白路

ソコ

鹿角屋のまふをたあつ 嵐青
お茶やの松上風さきく 浪化

山カク

きよれいあつあつ太美之 六之
京の吐も 久一あつ

ヤヘ

カキ

△ありあけ 七下及多音 〇
月又るう頃博のまあつ 示右
舟車分あつる屋店に仕切り 一林

去

あつ白体の襖くく 去右
笠白きを奉あつる ヤ水

去

箱あつて大はの屋い入く 且多
自道のはのまあつあつ 川

去

むの息室のまあつあつ 口通
蒜くらう一香をあつる 龍浮

あ

社者ちあつるあつあつ 一井
去士の双あつあつ 揚水

次句

人の猫の目をそむり 角
他のまあつあつあつ 小枝

お辰

休あつあつあつあつ 牧草
三去の例えあつあつあつ 何と

推

推あつあつあつあつあつ 何と

○らむすめ

△らむ三去

カニ

カニ

和台

初月や先匠をたのむ

おのつし解の松を眺む

車やのるまを便す

木の白き桔梗や美女隊む

白く潮波度指乃情くむ

は多よを合せよや持つむ

に立りの種うをさすむ

古拾

什戸柳あたる宿やめむ

川底の杭木や新の傳つむ

浦島や信宿の悔むむ

麦飯の井や室工産むむ

後々々々々々々々々々々々

飾を吹田のち作いさむ

産出すと苦地を思ふむ

△らむ三去

あつちや牛も人よりむ

捨

カニ

カニ

今

今の乃々々々々々々々々々

世茂の草乃世々々々々々

早田の仄み表々々々々々

戸下とれい屏風倚り

昔々おの乃上流り

昔中流り杖て出々々々

まのあをちりい流り

はす小為流のち上流り

月々けいあれし解の歌り

長句の何多うれとけり

△赤めぬ苗三去

さういそめつ々々々々々

用心のつらみ玉にせむ

あつちの時言い下り持り

紙の原々々々々々々々

今々遠板えおちあむ

金布いもりあむ

反衣

カニ

カニ

カイ印五

三

とそやうさうしや

三笑

宮よりの日のまもま可
侍子の光ねてもねれす

了

もくしひ天竺の鬘もなま可
をておく合納のまたりやま可

恒吉

戸柳の隠いりとおさぬ
笠のよめる柿房さね

白鳥

△とそやうさうしや
△とそやうさうしや

去

葉小枝と葉の十指のうくと
る部つく済の法のもろくと

白鳥

大輝く小輝く喚へ伯ちうと
柏舟の如く柏子とえくと

去

ひびきききりも猿のうとそ
嘆分の葉もきき白鳥そ

白鳥

世中の人乃月とひ連すぬそ
けつらけ口たきき止うそ

去

松原の東進子の面白や
ふもとあきく医王の美さや

白鳥

面白の娘女の秋乃扱すも
相織しゆをひるも

去

ちんちんとそあらの極ちんちん
久火時分うとて登るう

白鳥

月影もまて海苔の扱の長さ
候ちんちん湯のあすの短さ

去

葉うる葉の葉を堰ゆ
乃ぬ地井戸いけあの短し

白鳥

子供の子すよおとさく
角へおさくよきて来まくと

去

△候まうしあき面ま
△候まうしあき面ま

白鳥

もしたぬ候もとり
扇室紙帳つらむらり

去

去あくたの笠もあつ
さき争の元にあきいそり

白鳥

人まの抱く返りあ
あふ中まも似と表あ

去

遊吹

信

去

一橋

去

一橋

去

信

カイ印五

三

| | | | | |
|-------------|--------------|------------|------------|----------|
| 士 | り | 杉 | 文 | 栗 |
| 尾上之痛つ木鼻えうあき | △ちあへへ 苗あま カミ | 大炬きくわと春梳もあ | 吸おあんとすも際もあ | △よきをみ比あま |
| 松布 | ▲素後 | 概乃あも松杉もあ | あぢまのいもせさく | 木角 |
| 佐てあの子のあきさき | 山科はまひやむもあ | 山科はまひやむもあ | あ月やあては出とあ | 栗 |
| 杉敷 | 拾うこ又のやあもあ | りあああはひもあ | △よきをみ比あま | |
| | ▲昌巴 | ▲吉吹 | 木角 | |
| | ▲正位 | ▲巴弓 | | |
| | ▲蒲右 | ▲国水 | | |
| | | ▲系根 | | |
| | | | | |

| | | | | | | | | |
|-----------|--------|--------|-------|-----|-------|-------|------|----|
| 新 | 梅十 | 三笑 | 名却 | 水仙 | 比 | 孫志 | 孫 | 梅十 |
| 家のあまるる後せよ | △哉苗 ねま | 川そてかうあ | 方あはうま | 髪はあ | 言さこのあ | あをて杖つ | 梅の老木 | 二 |
| り下 | 多行有 | ▲考占 | 考占 | 石り | 角 | 七る | | |
| キル | | 考占 | 考占 | | | | | |
| 梅文 | | | | | | | | |
| り考 | | | | | | | | |
| 草二 | | | | | | | | |
| 伯免 | | | | | | | | |
| 不然 | | | | | | | | |
| 莫者 | | | | | | | | |
| 免白 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

一橋 去ゆく一類ある陸子 開英

氏義 桂志く文科凡の言中 十去

十七 煮むより号よ又女子 高占

古拾 穉新衣 おりくをり 翁

夕テ 産るる髪をぬけり ソウ

十五 面白う梅月てうあう 紋奈

あ 麦を煮むよおわれぬ ソキ

三笑 御よりあの言季を説て 香原

コウ 寝い袴も 志コ 古習

依 午膳も煮れぬ日和く 昨古

△短句てぬま浦カ仙とる句一三

△短句の上通てぬ古式と一庭一あれも 甚ん

△短句の百句一三の行より 却て一たあら一三

△短句の二世定い甚るるあきるく 甚ん

△短句の二つ許さうおれ去トカる句ニカ行より 又

△短句の割すくきやた一峰の候の中位季位位方凡

△短句の似笑ホいえ古桐より出て箱コ極亮ヤ一人

△短句の縁句のてぬ二えもりくあうく先け人

△短句の縁句の縁句のてぬ二えもりくあうく先け人

化仙のまらふかよありて
百のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

角田のまらふかよありて
角田のまらふかよありて

か

き

く

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

こ

け

報 あいのかげ乃
あといのり
あといのり
あといのり

大徳 去日二
あといのり
あといのり
あといのり

二たある故二たのり
あといのり
あといのり
あといのり

去日といそ字の字
あといのり
あといのり
あといのり

△体字苗カ仙
あといのり
あといのり
あといのり

杉 杉
あといのり
あといのり
あといのり

ほか ほか
あといのり
あといのり
あといのり

詩 詩
あといのり
あといのり
あといのり

あといのり
あといのり
あといのり
あといのり

あといのり
あといのり
あといのり
あといのり

破のさしひの合ぬひし手
 ちりと解る所の破ん
 谷まぬをうくま下
 ちうてまき足枝の角橋
 乙子の尻を肩衣
 出代の腰に控るる持茶履
 三つの日あしころんぬ
 △てまきカ仙十五歳
 雙の翁と引控て小枝
 三層紙一をあちうて後そ
 八字
 吸わいふころ時よきそ
 林坊
 あくのきりむのせよらり
 一方子
 清橋くすれ目利の連りり
 字
 子おゆり 佐木さま
 花
 糸よりも志をん不ら親に似て
 子
 三世おもあをぬ恋す
 仿
 浮なき紅の神もまらやら
 枝

新おきおしおきてあ
 多たのゆこの玉更さうと
 坊
 たまのこ 子供が笑取らぬ
 子
 松の木の子あまを町の名
 字
 死ともいふ所ともいふ
 枝
 己伊の園と月とを分
 子
 十のこ下結る係の影しは二係を見て句係
 仍名易の時に才之字角よすは癖位を止す
 子

□打合辞
 昔より打合辞はテ様よの才三の角に三ノの中
 打るの角に六ノの中七ノの角に八ノの中表の内
 たりと長し然に打合とて同辞と様より係の中
 より才の角といふ様と然より長しは様よそん
 本式の儀紙に二行ありは二行ありは日替をて足反
 あしと表とけと係する古今通式之程已下ま
 打合に扱するは二行きの時に表も併するは係あり

終さすして

お扱より

杖の目

粘を

月より

正字

まう

あめ

終より

不燭

終さす

杖の目

月より

終の影

表

お合

お扱

足

正字

ちや

陽

陽

扱

扱

木

木

長

長

け

け

△

△

押

押

て 厚く

印 筆末

拾 苔

、 引

、 焼

、 白

、 あり

、 一

、 白

、 賣

、 一

、 底

、 一

、 底

、 一

秋目

懐子揺揺きりて又出る 胡及

下戸

下戸を傍の言の秋乃亭 力兮

奈

あの奈い乎う秋風を渡りて 以之

香丸

燈おの香を暖とまぢりる ソラ

花

花おろろの双さのふ 川水

花

ま止ぬきあ戸のて思ふる 苔葉

花

さー残るる世翁の暮 夕葉

花

花

花

花

□同字付の不撞

花乃まあ白のまを又て付するなはいまの

字も付白と撞す但月をばおし限れり付

らま守及余の同字をよく付るまま撞とす之

夕 一代は又とあるまあ人あや 井炊

花 四大名ももをさしある 栄友

花 花いれをれと思ふおの花 聖向

花 ちいさういふまてをんきさう 白尾

みの 三月のう月おさう 煙れ他 夏月

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

△三行成経不極辞

てよをものともる。△三行成

已上の字数を上中下
 並三行成力仙一不百
 句よ字をうて二三ふを

倚あり二並成いなききと同字もあふあり
 腰のて腰のよとくする七この低句は限て
 ち白の中ありま又各あり或いれいきけんの
 ときをさゆのり押字もいれ抱字もいれ
 れてけりなききとされと打残ふけりあり
 名やう向拍子も用寸早ぬけつて不のぬとそ
 も却て辞の指合い此声は倍倍ありきれ之約
 實はうてよをものとすぬれは倍倍も
 けりも極さうり下はひく支考那の傍りそ
 もゆく支考あは倍は倍ありのけり自能さき
 引くは二辭のむをを極さういありや否とも

ニッてさすか為たされて 相葉
 如きよ油をいれぬ不記 叶得
 位別て目する初の浦傳 業云

上 上 上
 まともりの林の風音 自笑
 控うてあはれ麻は年さき 如風
 後ろりうて幕を通さす 如我

中 中 中
 月高は寸切もや寸察位 嵐高
 園栗枯て担山終りり 神教
 二之儀引扱ききのれりき 我

下 下 下
 大さの川幅成る向風 夜
 一本を焚て仕す松方 雲
 指の木は通別なる角田川 叔
 せきさぬあう母をむえ又 占お
 海不はそよあといすち遠本 桑席
 樺の袖くたをさきひく 桑席
 お血し侍子をまし子の忌言 叔

五段ハ

紙矣を拂くは初下 千角
 夕月と新むは味を擗る 八水
 かしこもあす悪く振ぬえ 八水
 賢けたま分侍 大後 八水
 何かく是下ては笛のさや 八水
 水取は合長さきき 八水
 つる子ふるをわく 壺笠 八水
 幸んまむむせ返る 菘布冠 八水
 江戸防の房同しはくろの脊 史邦
 弁南の菜を只おく石の上 八水
 浪しききよ鳴る 松子 八水
 江戸防のふと人ふ悪く丸くねて 八水
 おくく中よつつきはきき 八水
 月そくくるの障やむ早の 八水
 ませの儀はふめく川 八水
 戸をへらへ同辞流くるあへ 八水
 切着をちやおひよ打立て 八水

廿四

松白

葉手きむけ 栗橋の雲 八水
 松杉を挨拶 文士の門 八水
 ちのまをきき 江戸の坊 八水
 界の佐花の思危もつるめ 八水
 上るよあひをさむむ谷川 八水
 美き方の思君と実を見泳 八水
 表のふらふをほむこの子 八水
 保えいあれと平治は只二巻 八水
 けあのおそく強きかぬ 八水
 神心は老むかき世の風 八水
 は山休をきぬぬおあ 八水
 新宮のつるも月秋の白妙 八水
 葉つてはまの松の小島 八水
 拉中松るま月出く 八水
 京の殿は柳弓よる 八水
 誰さある世のまきしは守り 八水
 江戸中も毎のま合 八水

カイ脚立

三

根中

上の

今更
上の子
今更

在表

中の

短の
のく

梅
中と

三尺の短よ小あぢりたのる 寺角
 ちや魚子母を情むけは 方丸
 或はの戦友と是やくす 子夜
 遊水園を控ぬわろ ソ巻
 白雪の夜部 凧立の十鳥 信風
 又疎疎のあはよさめりて 子夜
 清の直ぐのる 芙蓉は 嵐雪
 梅は桂の竹の子乃中 支考
 二十の笑をあやふは 正秀
 まは是ちの程を 拙筆
 哀めて目をさるる 風石
 朝の声のけを 拙明
 ひくささきさや林を 泥足
 風よ二尺のうを お有
 一の梅よと快の 桃 甚二
 市のあぢり店先の 有琴
 さあ只今とふく 七石

三笑
中

文月
上

教
下

お花梅とついでに 柳
 舟をたくくと 柳
 西の地獄も極楽もある 昨古
 き声は月が文め 浪花 琴之
 陸か人もおはる 二
 芳より親れを 古賢
 正月も 橋東
 孫よあくさむ 嵐枝
 人おと隣に花の 柳コ
 蓬は梓の 寺的
 出代も 枝
 大工の 子夜
 偏梅も 的
 梅むし又 松の 松
 大田は赤子を 史邦
 花子のあし又 史邦

| | | | | | |
|--------------------|----------|-----------|---------|--|---|
| 夕 下す か 下す | 松白 中す | 寸ふ すぬを | ヤ 中す | 細き井備せよるきあひ 去風よき夜更ゆ振笠右 園のむらさきぬ棗の青 秋の葉をさるむししの杖 実入よきまのひや田舎して 乙をさるあまのひは 押別て太まれりあふ麻 な加は物の僧乃首途 △折枝並不挿婦 けの子あす杖乃乃 あまのさるまのさきむの山 去風さすすへ合の御布 枝より序よおろす杖の枝 日は何り往すこと 月よりかき去るすすの身 | 霜 嵐景 去来 条柳 史部 玄談 示右 三思 五由 |
|--------------------|----------|-----------|---------|--|---|

| | | | | | | | | | | | |
|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 未未 中ふ | 九 下す | 化 中か | 夕 中す | 夕 中す | 中す か | 中す か | 中す か | 中す か | 中す か | 中す か | 中す か |
| 長藤仕りてさるさ風 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま | 初花の極よ古竹踏は なまもつぬわおとま をくを我又おりて 大徳もあれぬ化社の 系て又されりちあぬ 推し日履の雪端 杖 若代はよれい貨も すを何やうりい死合 振工はくももあま |

白^ウ 中^ウ 三^ウ 中^ウ 上^ウ 中^ウ 拾^ウ 中^ウ 下^ウ 中^ウ
海^ウろとすれいおおとくや 牧^ウ 羊^ウ
よ中の花やう香てむの奥 子^ウ 青^ウ
懐てあ人の海子考^ウ 支^ウ 考^ウ
出て勝れ^ウ 橋の川^ウ 林^ウ 角^ウ
海^ウの相^ウも山^ウより香^ウてあ^ウの月^ウ 白^ウ 考^ウ
云^ウてあ^ウれい^ウや^ウ乃^ウ孔^ウ定^ウ 芝^ウ 船^ウ
真^ウの^ウは^ウあ^ウく^ウ格^ウ居^ウる^ウ 才^ウ 考^ウ
花^ウあ^ウれ^ウむ^ウさ^ウき^ウ家^ウも^ウ止^ウれ 古^ウ 考^ウ
田^ウ面^ウむ^ウれ^ウ海^ウの^ウ相^ウの^ウ寸^ウ 糸^ウ 考^ウ
お^ウ乳^ウ席^ウで^ウ香^ウる^ウお^ウや^ウま^ウぬ^ウも 如^ウ 凡^ウ
名^ウ抄^ウ一^ウ一^ウ香^ウの^ウ玉^ウ之^ウ 自^ウ 笑^ウ
夕^ウの^ウ日^ウ清^ウ子^ウ張^ウ一^ウ人^ウあ^ウ性^ウ 乙^ウ 考^ウ
新^ウも^ウぬ^ウ守^ウ角^ウ入^ウて^ウより 小^ウ 枝^ウ
花^ウの^ウ草^ウ新^ウま^ウも^ウひ^ウく^ウな^ウま^ウれ 字^ウ 中^ウ
か^ウつ^ウ在^ウ不^ウい^ウま^ウ區^ウ區^ウ 考^ウ
七^ウあ^ウる^ウひ^ウ人^ウの^ウむ^ウら^ウさ^ウを^ウり 考^ウ

高^ウ 下^ウ 中^ウ 一^ウ 中^ウ 白^ウ 中^ウ 上^ウ 中^ウ
余^ウ程^ウ柳^ウく^ウ乙^ウ香^ウの^ウ末^ウの^ウ 枝^ウ 考^ウ
あ^ウら^ウさ^ウを^ウ海^ウを^ウあ^ウく^ウ又^ウの^ウ末^ウの^ウ 口^ウ 通^ウ
あ^ウら^ウさ^ウも^ウく^ウの^ウせ^ウま^ウの^ウお^ウ 乙^ウ 考^ウ
何^ウあ^ウと^ウあ^ウら^ウた^ウ弘^ウら^ウる^ウ中^ウ心^ウ遊^ウ 園^ウ 友^ウ
門^ウ外^ウに^ウ室^ウを^ウ控^ウる^ウ天^ウ新^ウ寺^ウ 乙^ウ 考^ウ
死^ウれ^ウと^ウ人^ウの^ウ状^ウの^ウ名^ウさ^ウり^ウむ 乙^ウ 考^ウ
帷^ウ子^ウも^ウひ^ウき^ウま^ウる^ウ八^ウ九^ウ月^ウ 考^ウ
陸^ウ子^ウも^ウ折^ウる^ウ帆^ウ柱^ウの^ウ折^ウ 清^ウ 凡^ウ
十^ウ二^ウ季^ウ定^ウの^ウ下^ウを^ウ控^ウら^ウせて 仙^ウ 尾^ウ
メ^ウ出^ウさ^ウれ^ウる^ウ香^ウの^ウ末^ウの^ウ 乙^ウ 考^ウ
つ^ウり^ウ取^ウる^ウり^ウ明^ウて^ウあ^ウら^ウち 車^ウ 考^ウ
と^ウ合^ウの^ウ人^ウも^ウ多^ウき^ウる^ウこ^ウり^ウて 河^ウ 考^ウ
人^ウも^ウ同^ウく^ウも^ウき^ウい^ウる^ウ月^ウ 嵐^ウ 考^ウ
早^ウも^ウひ^ウま^ウる^ウせ^ウき^ウい^ウあ^ウれ^ウ茶^ウ 又^ウ 考^ウ
依^ウき^ウ早^ウも^ウあ^ウる^ウその^ウと^ウ茶^ウ 一^ウ 考^ウ
山^ウ家^ウも^ウ町^ウも^ウの^ウあ^ウれ^ウて^ウ 巴^ウ 考^ウ
更^ウに^ウ推^ウて^ウあ^ウら^ウれ^ウい^ウ何^ウれ^ウも^ウ多^ウく^ウあ^ウら^ウす^ウり 巴^ウ 考^ウ

カイ印五 三

● ぐう天竺

△ 我輩は三枝不燼燄

のり 呉九疑 正イカ イカ、ナツ とくそり

や 契日氏 僕 物 秋 群 下り

仁指がまうて屏も格も 蒲乃

悪谷の障子白きけし 畑 宗康

誰が来とや戸かひでおる 喜翁

あうもろいぞれて思は後向 乃

又おぼえがける情をいふ 涼ト

不化定平の下次が定情れ寸 李仁

奈答まひく定信の川喜 園石

あてあろやの立拂は扱がぬ 南取

大急おりの扱をいそぐん 加徳

衣張のまえは琴の曲も出る 林舎

お幣がきりさきうあは任はる 以之

お茶とくつふも大伴のさす 左把

庭尾舟が戻りもあぬむの中 麦士

卒もきん 甲文 目も涙もあ 呂杯

上 丑

身白

白セ

フリ

梅十 呉が

拾 う

三 天

笠

良 女

拾 イッ

奈おと舟と昇てむ言の月 梅光

廣も障が舟て来うり り紅

あまのうとあまの果は風もあ 舟友

あまのうとあまの果は風もあ 舟友

誰うまの 桃原向の芳一さ 工山

後交の清うまあもさ尺 琴之

まはる弓も又守喜田の紫の哉 桃妖

あまのうとあまの果は風もあ 舟友

あまのうとあまの果は風もあ 舟友

名月の他と姿も御控て 亦三

化しぬやぬうたもあ白花 連支

世病とつらね乃下み 席岑

扇の甚うるもあははめ キ角

月あ作らまのふ山 弁外

あまのうとあまの果は風もあ 舟友

あまのうとあまの果は風もあ 舟友

あまのうとあまの果は風もあ 舟友

いつともあまの果は風もあ 舟友

カイ印五

● 九尾

去
十一カニ

曉い子車の也く菊力兮
碧頂て大徳の候入より
何やらきくむ我玉の声 故人

俗
イヤ

凡像の始や、奥の田植身
いちこそおて糸没草
水せきてひねの夏や草む
子那

夕
五

庚まろくや申まろくや
出字く思ひき守の内より
穽尼

教
二日や
三洗

愁ぬ舟や悟る仕のく
暮まろくおの哀や八代聖丸
兼那

あ
五

去の舟るよほのあき甲
長手や子き伯ま候と細て
昌居

アソコ
五

筑あや九十九瓦の女一人
巴らちんをいもれ汁ち
之乃

合
お

灯大や月も出るる男入
之とちの松のよきやゆか
お月より和候の文の去南十
里川

白
見

待も只あれ方の味名
おの人をたやひはは隠住
角

和
花
同

まろくくの苗や布袋の夕涼
揺るるをき六月のちり
交考

カ
イ
五

早を捲て言の月を午
おしりや音も冷るる
松むも

カイ印五

五

をすまふ... 賢信... 文約

はや... 賢信... 賢信... 賢信...
賢信... 賢信... 賢信... 賢信...
賢信... 賢信... 賢信... 賢信...
賢信... 賢信... 賢信... 賢信...

山

山... 賢信... 賢信... 賢信...
賢信... 賢信... 賢信... 賢信...
賢信... 賢信... 賢信... 賢信...
賢信... 賢信... 賢信... 賢信...

トテ

むらちるそよ夜てき不口 之白
を在と在ちくく隊まろり 鬼費

去と林

いづ指是い妻そめてこや 林手
舞年の利発を町又弘めむ 吟山
手直の所の幸もけりりり ソラ

拾

月も今者し又むるの布 三指
誰う使くむ碑の落の亭 雨相
養生を括木のむと括保て 口通

あ

去の抱く母衣をさるむ 三指
初喜いーきを思を化被るむ 三指
夫の衣をぬしくそあけ 不玉

あ

あ友の思布いほしき思もむ 出芳
木をさあさりの高のうんれ 風麦

八夕

美尾をさせむし人の辱て 三指
几所を強返さむと持弓 牙人
狗も向の明神乃る 乃老

美

夕暮ま年房ひちむと離れえ 三二
东风はる流球表装し 支考

あ

切まてくる小田のお者 呂丸
歩まくるるの脊ある木津の舟 不撒

拾

其標の之舟の悩の思しき 三指
後子よりくる金二万有 残人

秀

いとせき子を他人も号けり
帷子も風も屏さ中小性 行車
あつら返るるを美唇の文 角

夕

美しき声の白を覆てる 几峰
さしき時を内て小神を 智欠

夕

あつらの出出通しと二葉ちり 呂竹
いよの便のひりとあき 百花
るり灯の月をくくじとくく 指風

カイ印五

六七

白く 後 幸 子 藤 月

去るも秋の風よとかなれり
あつぬわらふもふくくり
葉おとれぬれあつぬり
まてめてあつぬの大目
そこ揚るお雨もくく人の声
をたのめぬも内をくくそ
お雲の似合て雲の戻りさ
雲の白乃時多行り
竹はけりくちのちのちの
えちるに開く雲のまより
くく時多くくわらり
空へ雲を一人来とあり
こそ抱て又せうとそく抱
否あつぬおけけくく
何よきくおやき守り信
松の山嵐を中腰よ 文
月のこれ影月とやらて哀く

後音

小枝

酒壺

月

雲水

指さ

大川

子結

涼中

竹花

嘯風

踏小

不推

千枝

千那

百 山 梅 夕 冬 藤 月

独れを三ツク する
すんすん月の出をむる
まよあつぬ月の賞を
お一掃寸時くく月鳥
又秋一き秋の帷子
代々くく多の花を打りて
よる大のおとくくつたを
ふんいむをきくく
隣くくお次よすの筆のむ
まよあつぬ秋を足知
たんでいさき事の
あちくく使と文と行
入おまよくく月の木
秋の麻を足れを
菘神くくくくくくくく
揺衣笛くくくくくく
のりまの将寸木鳥の山乃
ヤ水

市中

潮風

新橋

万友

李吉

天宮

妙航

六之

り音

松川

り紙

白鹿

嵐街

巻母

百笠

背を見て中へ候ふあり 三折
うちを履むきをぬれは果す 一故
今の山風より今 井炊
忽ち鬼はあらしと 源卜

□ 伴用云書法

高田日押 九熊流の字より名押後用の字
初は依令古式一二とつともおぼろげに
定むべく其外の字は面をうへ八と定むべく
七とらひ五とらひ三の字去いたし及を
指すおぼろげに二も二もは許さへん
△ 氏後一程万連の何れおぼろげに面去
之去小の軽市を分あすく時三去のお
面を痛く二去も許せしとそれ伴用の
字れと細あり定むれば多候し扱へる
△ 三去用云書法は不協
扱は出てあれや待て歩む 支考

自
キヨ

那木さす候し流子と登り 小枝
使はすくさすて下され 小枝

あ
カケ

手はさるるれいひさりと 左大
手よく淋の先をよやら 李王

麦
カケ

良の葉を連し隠せし呼をて 麦株
目もあらしり着板の伊達 已覚

女
カケ

乃合の言寄末る為大川 行下
芽も立あく寸大刺の材 水花

ひ
カケ

新からむ又と出来しひをそ 力多
何れもせぬし居る約 杉 残人

早
カケ

為忌し出さけりす余お 由戸
月文のやう新地のつら 記之
苦より表と出守 名木 東郷

●括カリ成

夏

花
たすまひし加さしむ
沙々く江戸の島子むれん
目茶きんで奈香友連
月夜ちて川うまきく
雪のわら板下し花生
糸のきれる巾吹れや
あうりまらふまきしや
花より熱人かよふより
雑の洞度とれんけり
毒公乃中の市の目きり
吹矢舟控て北風の奈た
毛の粟はくさるくを
乃終る成ておけるまきき
わさめくのさる七十
年かめすいさきま令おほひ
三去用云

小弓

詩
如り
車等

夏

蕨
一髪

杯

りき
生支

冬

乃終る成ておけるまきき
わさめくのさる七十
年かめすいさきま令おほひ

夏

又
又居
有がり毎成出入

東屋
お弟合知器を

信吉

又
又分て
久号をよみせきとて
ひちりきさきけむるわめきて
一皮通てんさきい
又すきく依反たさ一日和
とさるんれい愛いさりり

り

酒
痛
源

冬

又
又分て
久号をよみせきとて
ひちりきさきけむるわめきて
一皮通てんさきい
又すきく依反たさ一日和
とさるんれい愛いさりり

井

舟
伯
有

山

雪
栗
云

光

船
車
ト

カ

カ
三

切しやの茶漬は何ぞしをそ
 伏おを後何の病掃交れて
 仔細をききし栲衣の
 ありしむまを先州てとる
 袴借てきくを付ぬ小高
 林大さして採れよく産のむ
 日ありしよ工司にありし
 手くあひるのんをえりて
 あり髪えりて秋すし
 了。西血を付てゆく
 次付てるめ付る未申
 腰乃つ付てむ山の不化寮
 行てあく去用と怪の憑付て
 疾をうむ財をえりしむを付て
 莫草合の花のさくよつけり
 之類もつ付ぬ浮世の楽をする
 きめよききくを化粧する

符 占ホ 里ホ 土芳 苔藤 乙甫 乃高 苔藤 山只 杜若 之伸 貝屋 口通

む月あくのいさひする家
 祈するおあの中を押し出
 きの布袂衣の為化粧する
 かりくするよ足袋をうき
 する袴の高るよすれり
 女付てある谷の栲衣古日
 あのもむのちぬ工更らあり
 二枚ある産の年きき 松
 押さるる子粒の宝あるきり
 七あるひえの花もはきり
 履ありしよを履てありあり
 下板の響工職をあふり
 ひよんをひきりしをきり
 福之工をきりしをきり
 屋店よ草布ありて月の影
 丹波く使もあきてきり
 押のひきりしをきり

方凡 鼠考 史部 栲衣 支考 吉邑 宥枝 栲衣 本相 子波 子相

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |
| 雞 | 雞 | 入 | 雅 | 了 | 小文 | 出 | 上 | 華 | ウ | 成 | 雞 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |
| 末 | 寺 | 梅 | 上 | 句 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 | 冬 |

カイ印五
三三

| | | |
|-----|--------------|----|
| ムウ | 芝振の尚名きうく快使 | 不敵 |
| 六行 | さちらうしんく実常と舟 | 不頑 |
| 合 | 以花采女髪友のさか合 | 壺天 |
| 三笑 | 世合て度程のしき夕被存 | 壺平 |
| 百鬼 | 返込あしあやつりの果 | 壺原 |
| 夕 | ちまあしあし皆志ぬく | 枕娘 |
| 十ヨシ | お念いおえてくた去の白 | 梨之 |
| カク | 猫まきまきまきまき要りて | 天密 |
| 三カク | 意志あれ今の社合 | 宇桂 |
| 三 | あつ榜の名のよき又後とじ | 宇桂 |
| | 念仏うきうてちいそ | 万歳 |
| | さくさつ天志と振と | 涼十 |
| | 舟波てりし但るてり | 乙由 |
| | あききの孫とお腰をくれ | 柳河 |
| | 小使と行をきく極柱 | 栄友 |
| | 極まや極まきをさるを極 | 員由 |

| | | |
|----|----------------|----|
| 射 | 阿房の柳をまきちり | 乙双 |
| ツモ | ちりちりちりちりちり | 同以 |
| 三 | 小使の罷谷残さきうり | 山崎 |
| 三 | 不拍子お風と舟の控り | 雲白 |
| 三 | △五去去の用を捨る三去 | |
| 巳 | 三去の所え常におい三去とあれ | |
| 夕 | ひさこのれと分はり | 三 |
| 三 | あくと矢間の河東の舎屋 | |
| 三 | 字書けてけりあつこのいう後 | |
| 三 | 刃をさす子鳴る星月お | 嵐 |
| 三 | 三ありし行れん凡も切ら | 三 |
| 三 | 乃後乃社月と又思ふ | 三 |
| 三 | 麻のまきまきとわかれ | 三 |
| 三 | 三のぼりまきまきとわかれ | 三 |
| 三 | お夜木のまきまきとわかれ | 三 |
| 三 | 三まきまきとわかれ | 三 |

我兼之居る世のおどれて 正平
 花むとまをる矢後の菊 支考
 三日月の余よ夜をぢやせし 除風
 泰之白くはあちと案の丸お 考
 我様は机をさるのせうひて 極百
 此 さまおの字人よをきく其金 井角
 白兒 目よ立ぬすり者を別之れ 浪杏
 出代りて杖をせりしき 依く
 白時 田中の乃の通されせり 泉
 考の系海を通す後の考 泉
 皮 欠る眉 眉の子を出寸も多寂
 林 眉をさるて睡まじき心 桑常
 古衣 ちりくく古き袖のあれ残り 築業
 侍 かしこむる子い哀き持持 口園
 枕 すすきの同き子持林のこれ 牧巻
 枕 海なる兵具のつらめを付 北枝
 二五侍文

け抱言小定中内お安晴古日
 拾 けあより何と考一は位ぢむ 仰端
 け髪そくむる子のおさき 扇
 之鹿 けは母の我乃乃止山 許六
 け西行もわーややく 山
 タテ ねるかゝ独信のむお眺て 峰山
 枕 心を隠すお美々 林 翁
 け此の化お咄さるまじく 之乃
 めつゝ家よりおのぬり入 扇
 市向 座お母むむ邪座の泣え 不陸
 賣およ病志の伽の部をけり 考
 夕魚 言言あさきらるるも未まじ 為白
 言 言取の情よ登れりりま 考
 言又 お母よけ出代の言あくれ 雲井
 けあらくもあす小僧の言新 鹿え
 桑葉 飯の程よ小玉なめて又り 無世
 小 ふし人の内い小家て大きき 扇

コハ 小去の天を来たすたふ 利字

小 小歌のむ政新くはてん 不歌

ムウ 先振の南なきる 伏使 不歌

天向 ちちうちよちちあらく 夜袖

中 舟風も去の名物と情切中 キ布

者 去さすこきん中ちむのさく 幸平

キッ おろこのちちもはねおや り子

内 振ととりの内怪のまらる り合

山夕 おく伯又さつると油揚 杉尾

お 治治のよめぬおはれ 衣冠

表 後却の志うも笑て山花 牛角

笑勝 是とも集う笑止子乃 怪言

笑角 古事附くと時房の 湖 因笑

古 かく深のちさきさく古字 可也

三三用云 カイ印五

連とて度行替情 狂言 上忍

言啼喰吹吸 狂言 狂言

二去に去の傷を解するも 狂言

振山 高性をあつる小枝の連 支那

又星 及子存のあま連を 急子

又星 勢星や連を合切し 皮文

又星 ちち後立てる連のまん守 板橋

又星 白鳥の小傍のちちのまの 涼ト

又星 後意の衆の列をておの 狂行

又星 さあお新とらふ 狂言

又星 新に水もあれおまの 水南

又星 傳出のあまけはけの 乙抄

又星 たつと一夜と橋を刈りむ 犀角

又星 ちよれんむせんとの年 夏白

又星 舟より出く柳ちり丁の 伯太

又星 比村の度きと医者のあま 力字

又星 船やる秋の夕へそだく度き

| | | |
|---|--------------|----|
| 白 | 月もまきてきくまもつれら | 白 |
| 竹 | 門まの女房持もとの | 吉田 |
| 三 | 侍史の流流や管も史灯 | 島月 |
| カ | 藤まやおん家の持竹や | 右家 |
| 行 | お角おけいおちる寸 | 史部 |
| 任 | 約朝居して笑やしら心 | 種文 |
| 小 | 振高う持さけて | 之乃 |
| 白 | 岬のまねを籠うつ | イ指 |
| キ | 糸の切る几中穴れ | 胤浮 |
| 白 | 今きく月々 | 東管 |
| キ | すんくそ懸ち | 侯妙 |
| キ | 紙をわす | 函彩 |
| キ | え波の打もあれ | 昨古 |
| キ | りきやせ | 伯免 |
| カ | 松さやめ | 笠舟 |
| カ | 池田伊舟の杖 | 出勢 |
| 巴 | 菅州のさか | ぬ衣 |
| | | 守珍 |

| | | |
|---|----------|----|
| 白 | 後の唱束の水のか | 白 |
| 白 | ちん | 白 |
| 白 | 手 | 林角 |
| 白 | な | 栄友 |
| 白 | 水 | 高 |
| 白 | 肩衣 | キ凡 |
| 白 | 月 | 依 |
| 白 | 小 | 山 |
| 白 | か | 支 |
| 白 | 狐 | 兆 |
| 白 | 小 | 宇 |
| 白 | 峰 | 巴 |
| 白 | 季 | 博 |
| 白 | 屋 | 考 |
| 白 | 松 | 井 |
| 白 | 大 | 珍 |
| 白 | 室 | 後 |

カイ印五
三六

| | | | | | | | |
|-------------|-------------|----------|------------|------------|------------|----------|--------|
| 白痴 | 飛 | 色國 | 三虫 | 言 | 白 | 梅 | 東 |
| アサケの教習の杖をさす | ふちくくくとくさふちく | あまのつりひこあ | さういふてふるけきま | れもつたすよ灰す文も | おれんはうらうらふら | あせてるのよまき | よまきのあか |
| 夕 | イ世 | 長 | 吹 | 草 | 知 | 夕 | 夕 |
| 夕 | イ世 | 長 | 吹 | 草 | 知 | 夕 | 夕 |

| | | | | | | | |
|-------------|-------------|----------|------------|------------|------------|----------|--------|
| 白痴 | 飛 | 色國 | 三虫 | 言 | 白 | 梅 | 東 |
| アサケの教習の杖をさす | ふちくくくとくさふちく | あまのつりひこあ | さういふてふるけきま | れもつたすよ灰す文も | おれんはうらうらふら | あせてるのよまき | よまきのあか |
| 夕 | イ世 | 長 | 吹 | 草 | 知 | 夕 | 夕 |
| 夕 | イ世 | 長 | 吹 | 草 | 知 | 夕 | 夕 |

カイ印五
三七

| | | |
|---|--------------|----|
| 枯 | 才子よとて都人の子と美す | 高白 |
| 山 | 大蔵の寺をよまふをまき | ソ由 |
| 茂 | 山隈の月をまんとて陸森 | 急弓 |
| み | 庭の意とて横柄か文 | 林鳥 |
| や | る乃らうの日は白ゆやう | 意芝 |
| 持 | ついでに人のあとの冷やう | 簪籠 |
| 山 | 欲さうふあやとむおてやう | 甚三 |
| 八 | おあまの又傳さうかり | 三夜 |
| 夕 | ひんごの粒珠やの店の隣 | 栗ル |
| 言 | あけを使乃戻し | 何堂 |
| つ | 献立は戻の便と行ふて | 楚隊 |
| | 最人の婿も計まは成る | たえ |
| | 即ちをういをして君は向 | さ乃 |

| | | |
|---|--------------|----|
| 句 | 若くは内を分りぬつまる | 源小 |
| 白 | 女子をうりうお思ふあり | 許六 |
| 言 | さし人の葉をうりなてやう | やハ |
| 突 | 時をうりう時てはか | 昨古 |
| さ | いふに十粒をうり | 三再 |
| さ | 附木葉をぬき | 立未 |
| 公 | 名月のさしきとて先祖あ | 物指 |
| 百 | 尾をまぬくをの持 | 音如 |
| 持 | 葉をまぬくをの葉の汁 | 天竺 |
| 難 | 地をあくあくあくを | 味飽 |
| え | 尾をまぬくをの凍あ | 仲志 |
| え | 代天度あをまぬの白 | 七色 |
| え | 岸の連さ | 有林 |
| え | あいつとさく | 島渡 |
| え | 夜子の橋も今を川 | 七り |
| え | 肩衣を再むのさ | 支考 |

ヤハ け子丁をきく摩う心付あれ 我思
ハセ けせよ丁そくくさる砂
夕 ちんとまふそてんる言語 白屋
末 けくまきくむもむあう 柳
之、 ちまきく余きり早き子て 只仙
淡む 月もまきくいねぬ言方内 柳士
白夕 何きんても暮るん月 匠者
何 先なる状は何と粟稗 小枝
枕邊 何やうせん言と為由く 士
ア ちあう何とつるひまな 采麻
百鬼 けらのお坊は何と田の戦 志翁
花橋 又又枝をその母下 琴凡

其血志くく一節の甚 井角
多却 晩のりそのも勢せ其葉 柳
之日 孫まきくまきく守又ま 度翁
喜林 使とより毒くつやまきく 涼上
中 種後くる田の中の小田 吟山
柳也 打れ下ろす中戸の心付 ソラ
心 後丁の中ちんと等とお終て 三惟
葉川 遠月拂あうるく藪の中 只
今 町中といふ社の杉林 秋房
分 咲拵ふむの中より月神 八景
山夕 中を叩く言を 新合 及我
山夕 我我の中より信も月のあ 車柳
山夕 叱のねて罵く大工の下きさか 車羽
山夕 大心是下く一日の換 巴兮
山夕 大庭いあ庭よりも後返 巴兮
山夕 大心是下く一日の換 呂仙

カイ印五

●四十一

| | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アカ | カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| 言 | 方 | 戸 | 干 | 夕 | 不 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |
| カ | 白 | 梅 | 八 | 炭 | 馬 | 皮 | 時 | 靴 | 鏡 |

カイ印五
三

難する人は甚なりと云ふこと去後ノ書
 あるがと読むも言置あれおかしおけとの書
 五五用云 カイ印五
 海し上り下り命引持連虫
 母集包約捨拂指拵お折髪次
 返りし為戻房取残髪剃り髪長
 は中三去とそれと係おきれさすおあり
 市尾 房書の一過一度は際口了 考
 川一ワ坊々さきおけは 病
 芝松坊々 妻乃妻風 風玉
 やるの漱下之坊々坊川
 志ぬ川人の坊々を眺あり 捨宗
 志上て 坊々及より 踏歩
 柴舟の矢橋之坊々を分系 小漢
 うきようをきよさる坊々 登費
 坊々の際々お折髪 紗御
 坊々集て坊々通 札 宇麻

難する人は甚なりと云ふこと去後ノ書
 あるがと読むも言置あれおかしおけとの書
 五五用云 カイ印五
 海し上り下り命引持連虫
 母集包約捨拂指拵お折髪次
 返りし為戻房取残髪剃り髪長
 は中三去とそれと係おきれさすおあり
 市尾 房書の一過一度は際口了 考
 川一ワ坊々さきおけは 病
 芝松坊々 妻乃妻風 風玉
 やるの漱下之坊々坊川
 志ぬ川人の坊々を眺あり 捨宗
 志上て 坊々及より 踏歩
 柴舟の矢橋之坊々を分系 小漢
 うきようをきよさる坊々 登費
 坊々の際々お折髪 紗御
 坊々集て坊々通 札 宇麻

カイ印五

五五

天何 雪庵にむ松の 根より 若臣
 寄 袈裟衣も思ぬ扇花の上坊 百川
 志のあつちの庵さう思よ 彦支
 燭意も後う上げ引きて 智仙
 師より月とむとのおぼる 宏芝
 新藤と牡丹の情より表より 小吹
 面におおの南なる上下一 キ角
 雪を根とある民さあ一 次我
 白雲を口けてあつめ山鳥 自笑
 杖や若さ分る安さとも 永年
 可分のむ傍政の面長う 杜呂
 際分て裾に牡丹のむう候 八葉
 唐くも儀をさう寸分え 子甘
 分て下く候さの月 子甘
 信吉 娘の母さうして情を思 翁
 上 晴う候の葉砂も思ひけ 一徳
 海 阿番のあ白の思の枝付 酒幸

志 長生公田の景はるす藤の 柳
 志 月更さると引記されて所 柳
 引 是引のあつちを 拾葉 田八
 水仙 園より引出す衣の香の列 香島
 水 板雲引たり才子文 八
 流む 小あつち引候て中 老胤
 六 引を通してつ内多引込 有年
 小弓 愛さるる名合の格は引扱て 秋丈
 木 水多のあつちあつく川の上 巴丈
 格白 遊て又わらばさうのよ 翁
 持 遠くはれ連をさうして梅冷 秋人
 ヤワ 藤たぐも後う候る小志 丸白
 柳 伝い藤たぐと花あつち 右音
 柳 娘のひささ子猫もわさう 文季
 山女 初雪のあつちあもさね子 里明
 高はさねのそとさつち 奈お
 何のあつちあつちわさう 柳航

| | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----------|----------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 小弓 | 花 | 酒 | つ | さ | る | た | た | た | 六行 | あ | 花 | 小弓 |
| か笑うの股陽約む木下乃 | 独歩りし 花の板立 | 口よりはれぬ名をなすの春風を | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 |
| 如儀 | 去末 | 史部 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 |

| | | | | | | | | | | | |
|------|----------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 次句 | 花 | 酒 | つ | さ | る | た | た | 六行 | あ | 花 | 小弓 |
| 花の板立 | 口よりはれぬ名をなすの春風を | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 | 夕月を花の車く杖の風 |
| 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 | 近仙 |

カイ印五

| | | | | | | | | | |
|-------------|---------|--------|------------|-----------|-----------|------------|----------|-------------|-------------|
| 三良 | 夜 | 你 | 次句 | 小文 | 和 | 百八 | 及 | 枯 | り |
| 一町のむすねれを借たぬ | 衣を包むありき | 女をうの下を | 美子先二をくは生来て | 又かくやうは声うす | 又かくやうは声うす | 束さく扣き戸をぬてあ | あふりおていさる | 秋風や着傍林の傍ありぬ | 一本の代を折来ぬほの相 |
| 新川 | 酒 | 方丸 | 史邦 | 嵐竹 | 天宮 | 以柱 | 新朝 | 巨由 | 金翠 |

| | | | | | | | | | |
|-----------|---------|-------------|-------------|----|---------------|----|---------------|----|---------------|
| 疾 | 疾 | 疾 | 疾 | 疾 | 疾 | 疾 | 疾 | 疾 | 疾 |
| 小傳を把てあやふ入 | 母親を又よふ人 | 白んおみせておんおぬり | 狐もあけとあををえぬり | 芭 | 送人う己おやお来りぬるあり | 芭 | 送人う己おやお来りぬるあり | 芭 | 送人う己おやお来りぬるあり |
| 二 | 序席 | 破栗 | 也栗 | 至芳 | 死峰 | 死峰 | 死峰 | 死峰 | 死峰 |

カク印五
六

| | | |
|---|------------|----|
| 笠 | 市の房乃多を連ぬや | 麻三 |
| 疾 | 満沢の房を風乃 | 若丁 |
| 少 | あつた房の影は月の子 | 六之 |
| 鹿 | 今に後くう房の | 宗長 |
| 鹿 | 侍らう房も志さう | 水也 |
| 鹿 | 志とく鹿杏房の | 宗近 |
| ヤ | 坊をさ房ては比乃去 | 示右 |
| 鹿 | 松根の今奪ふ風房て | 伝徳 |
| 鹿 | 取らぬねむる房の | 葉巻 |
| 鹿 | 乙多う被取て来 | 中く |
| キ | 初花のささき | 杉尾 |
| コ | 権成は房をそのそ | 松町 |
| 袋 | 多この房をむ | 号那 |
| イ | 各云士乃多 | 痛 |
| イ | 雪又下 | 房 |
| 房 | 町向く | 房 |
| 房 | 未枯の夕木 | 月 |
| | | 房 |
| | | 如 |

| | | | | | |
|---|----|---|----|----|----|
| 鹿 | 野火 | 房 | 房の | 庚申 | 支考 |
| 鹿 | 美 | 房 | 房の | 房 | 自笑 |
| 鹿 | 眼 | 房 | 房の | 房 | あ辰 |
| 鹿 | 痛 | 房 | 房の | 房 | 口由 |
| 鹿 | 月 | 房 | 房の | 房 | 正秀 |
| 鹿 | 名 | 房 | 房の | 房 | 被置 |
| 鹿 | 天 | 房 | 房の | 房 | 日取 |
| 鹿 | 長 | 房 | 房の | 房 | 事草 |
| | は中 | 言 | 房 | 房 | |
| | □ | 五 | 房 | 房 | |
| | 子 | 房 | 房の | 房 | |
| | 房 | 房 | 房の | 房 | |
| | 白 | 房 | 房の | 房 | |
| | 房 | 房 | 房の | 房 | |
| | あ | 房 | 房の | 房 | |
| | ワ | 房 | 房の | 房 | |

カイ印五
●七

高丸 衣も捨て静きよの中 柳屋
 世 食もあてて厚世のお宿 麴粒
 長 門く先くある 秋の田 羽織
 秋 黒布とあめり秋町の市 有葉
 新 のきさくもさされ衣 嵐雪
 元 古き金衣の拍 くり 百り
 高丸 今人の友を信と振返 川水
 亡人さ古き懐紙は昇れ 一葉
 家のおくは記をさすく 牛
 高丸の伝吹乃くは掛月 工座
 高丸のおちの記さしりき 占ホ
 比多は実の母の記吊て ち楚
 山陰の古くも家の又ツ 痛衣
 口あんでうろくいんとむる 芝草
 松葉ふきの号店の陰くじ 占後
 所はゆくく 管乃陰 香谷
 月高は梅も二度の旅返 啓え

及 石波糸の連なりこき 山桂
 竹 木は木庭町の奥よ三弦 土相
 真 板敷の足よ真よ家た友
 鏡花 真の世は 作る
 大子もみ 真よ 方丸
 藤系 真の世は 作る
 天何 真の世は 作る
 高丸 控極て小枝はむの心を記 更也
 名 うきさのるまは真の名を詠て 翁
 カシラ 肉も今も中と名をいし 依り
 高丸 今も今も名不乃具 友五
 高丸 の妻はあるむる 仙化
 高丸 秋葉末さるむる松の声 千り
 高丸 梅そ影の群る方い玉何 毒沾
 高丸 土壘の影もはるむる 沾不

カイ印五

高丸

舟より 算盤を斤より宋の戸して 為
 斤乃 算盤を斤より宋の戸して 為
 反 際よりさるる斤頗の月 弁七
 斤 此のまのま洞きへて悪草 之乃
 信 意いよは切の切の二行 之像
 切 切志めけとも昆巴の似奪 之極

□西去用云 カキコ

夏直位 笑思極川 眠是就居は十亦の態
 字の凡 何より西とてる句 七分の中
 一 唐字は多用あれ二云云入る 徳西云凡
 才云已上 文中多用のおい云云已上
 才を遣 追也 意遠 通 遠 遊 揮 持
 投 披 控 披 押 掃 保 消 汲 洗 濁 信
 洗 你 淋 泣 眠 意 睡 荒 思 忘 急
 懣 惜 悔 恨 忍 辱 煩 飽 欣 樂 定 安
 終 續 細 猪 籠 刺 初 被 高 召 向 笑

呼吐 突 齋 符 登 弱 粘 耻 作 借 促
 死 語 誘 誘 誘 誘 誘 誘 誘 誘 誘 誘
 盛 盜 乱 亡 甚 亦 川 誰 果 杜 枯 埒
 破 起 後 後 後 早 氣 自 初 干 沐 瑞
 出来 仕 旦 後 り 出 り 嗅 け け け け

山も 雲の 後 梅 末 天 不
 我 目 入 入 入 入 入 入 入 入 入 入
 所 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 地 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 維 も 内 裡 も 在 き 山 聖 者 下
 入 お も さ り 空 中 鳥 雲 せ い け け
 手 心 吉 也 や 柳 尾 の も 三 雁
 百 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多
 是 亦 さ り 阿 房 抱 人 葉 三
 所 是 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多
 言 人 多 多 多 多 多 多 多 多 多 多

三原 湘市の金屋へ来ておきそれ 杉
 き 向のお合まきふや人捕 曲家
 所務 信玄の天眼通の人信ん 辰一
 一 老余の資勢は不仕の厚ん 雲渡
 一 世流匠出守 机のまきき 月年
 一 海のまきひし一麻をおあふ 海云
 一 公朝の背刺よりさし 鹿井
 一 今まさちくはれい及あま 山店
 一 皮 ぶしよあひてりきお二重 山氷
 一 多 ささぬ悪く母をお文 占所
 一 候掃 おふねのん 仲まきき 伝晶
 一 一 へへへてまきおゆるもをやら ソ羊
 一 一 夢傳う向のまきふ佛伝 連支
 一 一 飛てやつとま紙の入道 相
 一 一 以連い手振て通るねのち 曲家
 一 一 志やかくとむんを連まき盛 正秀
 一 一 通のまきよ店ちる 林 支考

一 一 して通る絶三井のの候連 翁
 一 一 一 舟通の人候まき務の忘 夜少
 一 一 一 七りり大宮通推のまき 宇月
 一 一 一 天志くくま通海のち 似去
 一 一 一 中引くらく早九り通海 一
 一 一 一 小叔忌きて信の月又の母振 甚二
 一 一 一 信多きき一 振一日信ホ 一
 一 一 一 猿人ももよ振て後の安 右範
 一 一 一 農休とて 可の振日 一
 一 一 一 のせさう斗もお振志くうて 風州
 一 一 一 おんのおまきおまきまおれや 十念
 一 一 一 振ふ言句の振またりき 符那
 一 一 一 子んよちまのけりる能振 千梅
 一 一 一 振ふんのおけりてき 一
 一 一 一 ぶまのうのまき振海 月年
 一 一 一 一 振のた奥でまの振る 一
 一 一 一 一 五思ていれたまきく 一

カイ印五
 五二

| | | | | | | | | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|----------|------------|----------|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 高 | 誰 | 奈 | 西 | 急 | 後 | 要 | あ | 惜 | 望 | 情 | 三 | 皮 |
| 年ふれうして定てあつ | さくむき版付と志りり | 志すよん傳くる已り性 | 志むとあつ久大の熱きよ | 月を志ぬる山の光 | 月人あつきて持て志茶 | 志の急よむの機音 | 志る山の急乃とむ後 | 志すくつとまのつあま | 志すくつとまのつあま | 志すくつとまのつあま | 志すくつとまのつあま | 志すくつとまのつあま |
| 安伝 | 志衣 | 寛宮 | 翠白 | 宇甲 | 奈 | 衣 | 松芳 | カ | 甚 | 三 | 汎 | 口 |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|---------------|------------|------------|-------------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|------------|-------------|-----------|-----------|
| 恨 | 次 | 恐 | 疏 | 尋 | 望 | 煙 | 胎 | 你 | 欣 | 望 | 葉 | 花 | 定 | 者 |
| 云月を多ふとまと打恨 | 及巾披下て扱の書端の巻く者 | 全箱の人の悪てあるこ | おまの信をよる信りつ | 文よりひより草をよるや | 月扱を嫌ふ人もあつ | 自然と嫌ふあまの嘆 | 夜心のをよと惚ぬ大待 | 初夜よりちとをを位胎 | 正気おのむ風の静さよ | 行合の書上戸よて欣 | 文のお花の私を葉する | 葉をすくつとまのつあま | 夕空のぬおの静さよ | ちよまのの運も定て |
| 涼ト | 方丸 | キ角 | 扇 | 扇 | り | 汎 | 廣 | 紅 | 袋 | 嵐 | 井 | 紅 | 乙 | 風 |

カイ印五
五

息 尾のひれも終結さぬ者喰 万葉
 於 ま苗もつふと極終る云
 三 お終り日おえを待合 せ孫
 張 僧終り家後舟乃五云後 在交
 上 空怖よき月の神乃一解 出子
 神 神をさるる空の神能 ソラ
 き ねまの神乃白あき ト玉
 皮 英時を横し船の月解 一
 三 其の傍しゆ子申サ新 口控
 多 今結く勢を授け口や志 源ト
 一 結きて細泥くぬむの極 木言
 一 勢結て書し出る月お月 一極
 一 書風よ衣法結し机申 一雲前
 一 携信よ小衣結る給言云 尺叶
 一 万能も只一人の列の果 甚二
 一 列の純子のおまは森をこれ 甚平
 一 一列の 何乃試 源平

マノ 何の結きも喰 列の林 以解
 一 何初の層の四倍は五れ 之乃
 一 奏初し 壬生の念仏 反夕
 一 新し結を結初り 世竹
 一 咳初を思ふ候も結さる 三羽
 一 後し 徒ま 初く袖 断業
 一 予解のふくくる急あり 一級
 一 高し されし 乃女 氏士の身 一云之
 一 高し 柱をたすを待し 一
 一 尻は ちる人 の指を石連て 一り下
 一 あり けり ね乃 心石 扱は 一キ角
 一 ま ちと 門の 向の 文木 立 一月お
 一 檢 意の 向を 了し 垂 一セテ 一梨月
 一 月 ちの 智の ぬり 元山 一杏而
 一 ま ちむ ちの ちの 今 一急白
 一 い ちを ちの 矢又 一よ 一難 一隔 一七る
 一 笑 ち 娘 乃 一妻 一入 一西 一四 一り 一紅

カイ印五
 五五

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|-------------|----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 | 十一 | 十二 | 十三 | 十四 | 十五 | 十六 | 十七 | 十八 | 十九 | 二十 |
| 夜衣 | 笑 | 笑 | 拾 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 |
| 物へ身とむ人とは笑ふ | 珍は笑つて外の上は柳流 | 幸は笑つて笑ふ田 | 笑仲方の山も之は | 笑ふん竹も笑ふぬん | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ | 何れも笑つて笑ふ |
| 南木 | 赤志 | 壺平 | りお | 伯免 | 道三 | 龍 | カ今 | りよ | 整孫 | 連支 | 洞山 | 杏る | ヤハ | 菊 | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|------------|------------|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|--------------|------------|------------|----------|-------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 一 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 | 十一 | 十二 | 十三 | 十四 | 十五 | 十六 | 十七 | 十八 | 十九 | 二十 | |
| 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | 笑 | |
| 腹裏を袂扱や吐息つくらむ | 新巻はおきく成り終り | 身を問わす今衣解りぬ | 月をくく成中あつて寝る | 千石と登れへ人も人りき | 梅は月と登れと雪の雪 | 斗部をエ板の音と竹の風 | 休日も痛む人の意はらく | 忍ぶ代へ候のものをあきて | あつておきれい風ゆく | 約定の二もあつて思髪 | 芳加りい今の子は | あつての泣ととる草の戸 | まはの田植うめあつて | あつての泣ととる草の戸 | あつての泣ととる草の戸 | あつての泣ととる草の戸 | あつての泣ととる草の戸 | あつての泣ととる草の戸 | あつての泣ととる草の戸 | あつての泣ととる草の戸 |
| 似去 | 松り | け麻 | う香 | あ十 | 早麻 | 口通 | 二 | 平 | あ伝 | 年安 | 芳香 | 身法 | 身法 | 身法 | 身法 | 身法 | 身法 | 身法 | 身法 | |

カイ印 五
 共六

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |
| 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 | 拾 |

| | | |
|---|------------|-----|
| 長 | 月むの常さ終は喜んて | 臺平 |
| 美 | 星散てわれまふる | 李後美 |
| さ | 高きき信れて仕り | 豆餅店 |
| ち | はあさくうの候もあ | 依角 |
| 小 | 何處へ出て帰るの好し | 冒月 |
| 要 | 月に入る舟のや貴おす | 舟娘 |
| あ | 長持 貴人て | 之るや |
| 又 | お月や 御さ雲に扱て | 冬反 |
| 印 | 貴人へ茶入をありの | 匠考 |
| 葉 | 苗代の假借る | 些在 |
| 深 | あ子世でた | 山本 |
| 山 | 本家の子苗世ふる | 三和 |
| 後 | 後てきくき秋のあ | 御堂 |
| 洗 | はまひし地を踏を | 林の |
| | 五横と益て | 戸も |
| | 小細の例 | まき |
| | 俵末 | かき |
| | | 占 |

| | | | |
|----|--------|-----|---|
| 盛 | けの真はさる | 茹の出 | 盛 |
| 你 | 目盛るゝ | 麩う | 声 |
| 秋 | む成る | ま食 | て |
| 印 | 文治 | お | 我 |
| 皮 | 是人のあ | も | あ |
| 野 | 屋の花乃 | は | あ |
| 乱 | むい | 今 | あ |
| フリ | おの | さ | あ |
| か | 紙 | ま | あ |
| 山 | あ | の | あ |
| あ | 乙 | き | あ |

カイ印 五 六

瓜 蔓を刈して門は松くる
瓜 刈り時の爪を懐く
瓜 六月の梅摘る玉ありて
瓜 月半のお終朝の草刈
瓜 村をたもあれて小部一軒
瓜 鳥をたもあれて人を斬
瓜 乃をたもあれて世をわろ
瓜 布子三つて布子をゆがの果
瓜 川向ふれ使もたもあれて
瓜 いせ備の果いりて後扱
瓜 川のみありて田を扱て
瓜 扱ててちちちを扱て
瓜 柳の領扱るとちちのむ
瓜 かつのみ葉を扱ておく
瓜 長とも茹い葉よ未扱て
瓜 枯ゆく宿よあまらむ大
瓜 松葉よたしついの枯炭
ソム 伊良 糸札
水胡 侃如 富尼
ク兆 林和 風

ヤハ いるいある山字のうらめ枯枝
ヤハ 浮かろむと合め草支ある
ヤハ 着いで空を海よ未あひ尼
蔓 笠あそ衣の柄つりあり
破 柄くわ日矢とを玉こ送らる
炭 いく炭よりて集る炭
炭 きりむん登り炭より
山 去けてる炭て山を足あり
山 炭ててんこれいをる分あり
拾 引籠すたの意やおの月
オス とうきも舟よ申りた守る友
音白 貝豆のお 聲す 未あ終
夕下 女席の合て炭す刃常
夕下 五月と小社の隅も扱あす
扱 樽ふの初書ちり寝扱て
扱 根の厚くしきふ海をそ書
扱 庭橋荷根よ扱て仄ある
下尺 似去

蔓 何のじ狭のいふまじき 桐葉
 五三 いふあく竹の吹矢を夜まじ 菖蒲
 七夕 三才ももや 柳白 菖水
 百カ仙 ちやきりくる 祇屋屋の 柳帆
 ハヤ 外もちやゆ成る月のあ 支原
 ちや冷てある二日月の難 天意
 出下下往てあるちよちあまら 二々
 ちや之ともちや田のあきひの音 糸虫
 ちよちよちを隠すい火を灯し 松友
 月 先老の月の月まうらう 貝
 マウ 去る先老の折橋まうらう也 貝
 七三 先いひのこのよきおぼしきや 香か
 七三 ちよちよち先蒼子り新まれ 涼川
 梅山 ち今月のち原乃先入 支原
 先いひのち 柳白 柳
 先十人のそをい出まうらう 下個
 梅山 ち原の思乃報り子 子結

柳 師もあまのちのちのち 桑村
 二日 梅子の人は必とせうあや 柳河
 必 ちんちんちんちんちんちん 林角
 三美 梅の時時懸あまあれり 萱三
 ちよちよちちよちちよちちよち 柳娘
 ちよちよちちよちちよちちよち 枝三
 梅子おもはる母もある 仁行
 ちよちよちちよちちよちちよち 今下
 又軒と乃皆 遠り 柳
 皆目もまます念 柳
 向の影乃ちちよちあまら 柳
 ちよちよちちよちちよちちよち 只竹
 柳のちよちちよちちよちちよち 及朱
 ちよちよちちよちちよちちよち 菖蒲
 ちよちよちちよちちよちちよち 柳周
 柳の ちよちよちちよちちよちちよち 柳周

カイ印 五
 六二

女流 教多れて書の意を日と承て 付花
草の二三人を極さうくる 紫ホ
ムウ ありてその意を三三人に任せられ 花
君あり、れきりたる 妻神 六ホ
るまんの弁立云る上甲二十 浦付
水着と云てて多めさきれ 日
小月と書の申。む字位及 日
多きく言句も一寸降しあり 心犯
積るも珠おやの店の様子か 栗ル
今の所、何はあくる 一物
豆鼓志うく、定るの月 木音
八部のれいそく、仕込なり 木音
手れは小き叔お供させて 箱
川流をまゝ、あやの献ち 芙蓉
手拍次方、何、云、献 母風
賞ぬ香口火の海子橋魚 巴青
むの意、及、あ山を打眺 鬼士

小文 初一本を稿の大き、何、箱
貨 夕ぐれ、こえ、く、貨、之、投、て、 付水
你 船の卵の敷を、を、持、持、 相美
敷 多き、く、か、き、く、丸、菜、の、敷、 支梁
仇、あ、い、む、う、の、敷、父、友、連、 義
昔 昔、昔、今、の、昔、の、く、付、 信孝
残 昔、世、や、い、入、お、う、あ、り、 根方
、 昔、の、陸、古、池、は、あ、く、 温之
ヤ、 誓、の、あ、い、も、其、昔、う、そ、 扇草
、 手、お、ね、は、昔、の、持、り、帆、を、舟、 子正
只、お、去、の、何、ま、れ、も、世、中、浮、世、の、面、去、く、思、又、よ、
白、戸、 移、居、又、一、は、六、か、刀、を、は、後、 贈足
、 何、も、く、も、笑、て、す、た、敷、又、及、
、 方、丈、の、子、守、い、所、は、と、さ、れ、て、 茂林
、 魚、 何、も、あ、守、と、且、那、の、子、守、を、林、く、 乙子
、 木、山、も、隠、居、の、子、守、を、正、一、 茂阿
、 木、山、も、隠、居、の、子、守、を、正、一、 茂阿
、 木、山、も、隠、居、の、子、守、を、正、一、 茂阿

古今三 送字は因るに
 思字を嬌ふに古式之意のよに上下並に嬌ふるを元送字と云ふ
 カイ甲 六

花 月を差りてこりり 橋花 時子の中より一筋の糸 溢の手の二筋の糸をくまて 替の糸ふたの糸の人
 一筋の糸は月の中より入橋の中
 月を差りてこりり 橋花 時子の中より一筋の糸 溢の手の二筋の糸をくまて 替の糸ふたの糸の人
 一筋の糸は月の中より入橋の中
 月を差りてこりり 橋花 時子の中より一筋の糸 溢の手の二筋の糸をくまて 替の糸ふたの糸の人
 一筋の糸は月の中より入橋の中

日一 一筋の糸は月の中より入橋の中
 月を差りてこりり 橋花 時子の中より一筋の糸 溢の手の二筋の糸をくまて 替の糸ふたの糸の人
 一筋の糸は月の中より入橋の中
 月を差りてこりり 橋花 時子の中より一筋の糸 溢の手の二筋の糸をくまて 替の糸ふたの糸の人
 一筋の糸は月の中より入橋の中

△食相ニ去
とえ初りの酒、さめるとあつめ月の
△食相ニ去
とえ初りの酒、さめるとあつめ月の
△食相ニ去
とえ初りの酒、さめるとあつめ月の

△食相ニ去
とえ初りの酒、さめるとあつめ月の
△食相ニ去
とえ初りの酒、さめるとあつめ月の
△食相ニ去
とえ初りの酒、さめるとあつめ月の

砕て又揉るこのてしうへ
 茶の酒よまづあつて
 凡十少よまづ
 久七日月よ酒
 酒の便す心且月も入
 砕て塵山の宣の味
 ありてはと事の酒
 酒の流波は揉ふ砂
 新酒香あつてあり
 △飯の去
 重茶の飯通ふ後
 飯の焚寸よ上の茶
 会の伴濡の飯の茶
 △飯茶の器とあり去
 飯次よ大磁の桶も出
 飯の茶さして茶の支
 在いせ茶の先茶とん
 飯の茶とて茶をいれ
 △茶の去
 茶の茶漬くはする
 茶の茶をてむる
 茶の酒の茶人の茶
 茶の茶の茶を茶の
 茶の茶の茶を茶の

松川 支考 除風 松川 支考 除風 松川 支考 除風

砕て又揉るこのてしうへ
 茶の酒よまづあつて
 凡十少よまづ
 久七日月よ酒
 酒の便す心且月も入
 砕て塵山の宣の味
 ありてはと事の酒
 酒の流波は揉ふ砂
 新酒香あつてあり
 △飯の去
 重茶の飯通ふ後
 飯の焚寸よ上の茶
 会の伴濡の飯の茶
 △飯茶の器とあり去
 飯次よ大磁の桶も出
 飯の茶さして茶の支
 在いせ茶の先茶とん
 飯の茶とて茶をいれ
 △茶の去
 茶の茶漬くはする
 茶の茶をてむる
 茶の酒の茶人の茶
 茶の茶の茶を茶の
 茶の茶の茶を茶の

松川 支考 除風 松川 支考 除風 松川 支考 除風

可なり
 香川云うて二去の用あり同調用ありて又去る云て
 禪 忘る 酒よりあ 神 支考

白ク
 九印六
 五

第百三十五 衣の俗に
一、衣の俗に
二、衣の俗に
三、衣の俗に
四、衣の俗に
五、衣の俗に
六、衣の俗に
七、衣の俗に
八、衣の俗に
九、衣の俗に
十、衣の俗に

第百三十六 衣の俗に
一、衣の俗に
二、衣の俗に
三、衣の俗に
四、衣の俗に
五、衣の俗に
六、衣の俗に
七、衣の俗に
八、衣の俗に
九、衣の俗に
十、衣の俗に

武士のあはれを哀れむる
 女はあはれを哀れむる
 刀はあはれを哀れむる
 言の程はあはれを哀れむる
 化人とてあはれを哀れむる
 けりしあはれを哀れむる
 三日月のあはれを哀れむる
 くらりあはれを哀れむる
 伝はるあはれを哀れむる
 いきりあはれを哀れむる
 さつとあはれを哀れむる
 △日作茶枝二云

二此及心眉ト童力翁
 唱徑秀房ト又翁
 九翁ト又翁
 翁ト又翁
 翁ト又翁

酒はあはれを哀れむる
 山はあはれを哀れむる
 谷はあはれを哀れむる
 川はあはれを哀れむる
 池はあはれを哀れむる
 田はあはれを哀れむる
 園はあはれを哀れむる
 庭はあはれを哀れむる
 路はあはれを哀れむる
 橋はあはれを哀れむる
 門はあはれを哀れむる
 窓はあはれを哀れむる
 戸はあはれを哀れむる
 壁はあはれを哀れむる
 柱はあはれを哀れむる
 礎はあはれを哀れむる
 礎石はあはれを哀れむる
 礎石はあはれを哀れむる

八八八八八八八八
 乙泥枯牛支油支十
 物本居海梁崇考枝秀
 物本居海梁崇考枝秀

カキ印六

●秋葉堂筆記

金一ツ、^{（一）} ^{（二）} ^{（三）} ^{（四）} ^{（五）} ^{（六）} ^{（七）} ^{（八）} ^{（九）} ^{（十）}
 小坊をこめて、^{（十一）} ^{（十二）} ^{（十三）} ^{（十四）} ^{（十五）} ^{（十六）} ^{（十七）} ^{（十八）} ^{（十九）} ^{（二十）}
 花を配り、^{（二十一）} ^{（二十二）} ^{（二十三）} ^{（二十四）} ^{（二十五）} ^{（二十六）} ^{（二十七）} ^{（二十八）} ^{（二十九）} ^{（三十）}
 花の枝を、^{（三十一）} ^{（三十二）} ^{（三十三）} ^{（三十四）} ^{（三十五）} ^{（三十六）} ^{（三十七）} ^{（三十八）} ^{（三十九）} ^{（四十）}
 花の枝を、^{（四十一）} ^{（四十二）} ^{（四十三）} ^{（四十四）} ^{（四十五）} ^{（四十六）} ^{（四十七）} ^{（四十八）} ^{（四十九）} ^{（五十）}
 花の枝を、^{（五十一）} ^{（五十二）} ^{（五十三）} ^{（五十四）} ^{（五十五）} ^{（五十六）} ^{（五十七）} ^{（五十八）} ^{（五十九）} ^{（六十）}
 花の枝を、^{（六十一）} ^{（六十二）} ^{（六十三）} ^{（六十四）} ^{（六十五）} ^{（六十六）} ^{（六十七）} ^{（六十八）} ^{（六十九）} ^{（七十）}
 花の枝を、^{（七十一）} ^{（七十二）} ^{（七十三）} ^{（七十四）} ^{（七十五）} ^{（七十六）} ^{（七十七）} ^{（七十八）} ^{（七十九）} ^{（八十）}
 花の枝を、^{（八十一）} ^{（八十二）} ^{（八十三）} ^{（八十四）} ^{（八十五）} ^{（八十六）} ^{（八十七）} ^{（八十八）} ^{（八十九）} ^{（九十）}
 花の枝を、^{（九十一）} ^{（九十二）} ^{（九十三）} ^{（九十四）} ^{（九十五）} ^{（九十六）} ^{（九十七）} ^{（九十八）} ^{（九十九）} ^{（百）}

今あるハ、^{（一）} ^{（二）} ^{（三）} ^{（四）} ^{（五）} ^{（六）} ^{（七）} ^{（八）} ^{（九）} ^{（十）}
 花の枝を、^{（十一）} ^{（十二）} ^{（十三）} ^{（十四）} ^{（十五）} ^{（十六）} ^{（十七）} ^{（十八）} ^{（十九）} ^{（二十）}
 花の枝を、^{（二十一）} ^{（二十二）} ^{（二十三）} ^{（二十四）} ^{（二十五）} ^{（二十六）} ^{（二十七）} ^{（二十八）} ^{（二十九）} ^{（三十）}
 花の枝を、^{（三十一）} ^{（三十二）} ^{（三十三）} ^{（三十四）} ^{（三十五）} ^{（三十六）} ^{（三十七）} ^{（三十八）} ^{（三十九）} ^{（四十）}
 花の枝を、^{（四十一）} ^{（四十二）} ^{（四十三）} ^{（四十四）} ^{（四十五）} ^{（四十六）} ^{（四十七）} ^{（四十八）} ^{（四十九）} ^{（五十）}
 花の枝を、^{（五十一）} ^{（五十二）} ^{（五十三）} ^{（五十四）} ^{（五十五）} ^{（五十六）} ^{（五十七）} ^{（五十八）} ^{（五十九）} ^{（六十）}
 花の枝を、^{（六十一）} ^{（六十二）} ^{（六十三）} ^{（六十四）} ^{（六十五）} ^{（六十六）} ^{（六十七）} ^{（六十八）} ^{（六十九）} ^{（七十）}
 花の枝を、^{（七十一）} ^{（七十二）} ^{（七十三）} ^{（七十四）} ^{（七十五）} ^{（七十六）} ^{（七十七）} ^{（七十八）} ^{（七十九）} ^{（八十）}
 花の枝を、^{（八十一）} ^{（八十二）} ^{（八十三）} ^{（八十四）} ^{（八十五）} ^{（八十六）} ^{（八十七）} ^{（八十八）} ^{（八十九）} ^{（九十）}
 花の枝を、^{（九十一）} ^{（九十二）} ^{（九十三）} ^{（九十四）} ^{（九十五）} ^{（九十六）} ^{（九十七）} ^{（九十八）} ^{（九十九）} ^{（百）}

出流あると愛は分け出さず
昔公よ出る子ハ親の氣もあらず
市の便置の七口七口
○井上出る子ハ親の氣もあらず
う三三屋敷して七日市場の町に公あつた
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

在公よやる子ハ親の氣もあらず
且お母のあつた
やの子ハ親の氣もあらず
公と親のあつた
なれ親なり

風呂敷と振ておく言下
かく留る後まで行字持合られ振ては
の人々に違ふべし

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

おさくら目下も又田ん
笠おふらたハこ吸ひあ
○井上かく留る後まで行字持合られ振ては
の伊達よりたすの市便置しんき親とせむさす
天よ

長本

カイ印六

十三

肩持

の物、猫の子と白作せし、あつし、その余情、五百歳の工、史、洞
 たる、咄し、あんな、花、空、を、い、れ、て、女、侍、を、作、ら、れ、し、う、凡、何、日、の、現、時、に、う
 る、い、ま、の、時、に、愛、他、自、在、に、体、す、り、の、え、揚、方、の、流、し、も、い、ふ、こ、れ、皆、現、に
 ある、い、ま、の、時、に、死、す、る、う、の、う、腕、を、離、し、い、あ、の、を、耳、に、穿、て、こ、う、理、よ
 り、理、を、工、む、死、白、入、い、う、何、と、破、く、と、も、思、ひ、て、女、の、け、ひ、を、又、今、時、に
 稱、呼、す、り、も、何、と、む、是、を、何、の、流、し、り、さ、る、と、自、言、執、情、者、九、渡、
 あ、を、ば、し、め、後、に、穿、え、し、汗、を、す、べ、付、ハ、翁、も、あ、く、あ、き、よ、度、吐
 を、聞、れ、れ、と、皆、徒、ま、と、多、い、あ、る、在、り、て、情、味、の、中、に、守、ハ、徒、新
 の、刺、の、時、と、情、と、廢、古、と、云、ハ、け、ハ、月、の、近、い、あ、と、い、ハ、廢、古、と、云、
 て、さ、ら、ハ、強、志、之、文、考、是、を、傳、り、し、水、二、の、う、と、又、の、ま、し、あ、か、
 「南、菊、の、情、以、危、頼、と、あ、の、を、お、換、り、」

小、性、津、田、く、葉、津、野、中、龍、吉
 丁、守、も、子、よ、よ、る、一、き、杖、掃、着
 愛、又、誰、人、の、指、を、付、あ、ハ、死、白、と、あ、ん、と、品、引、返、る、切、羽、と、又、て、傳
 杖、と、此、ハ、愛、之、竹、の、親、親、も、也
 押、流、の、竹、を、あ、り、と、喰、ひ、ら、ひ、て、翁
 愛、又、負、の、指、を、考、あ、ハ、あ、り、穿、え、る、を、ま、を、笠、に、蓋、し、あ、り、柳、枝、ま、あ、
 と、元、こ、て、い、ふ、流、也

池、お、夜、に、捕、ら、れ、し、る、お、名、ひ、い、お、
 衣、着、う、一、の、ハ、こ、る、き、ま、る、珍、人
 愛、よ、ふ、運、の、糸、を、考、あ、ハ、死、に、お、あ、る、は、女、戦、い、お、若、の、汗、打、て、う、る、さ
 き、さ、い、と、い、ふ、う、さ、あ、い、う、の、流、也
 本、愛、酒、り、ハ、不、馳、天、よ、す、る、め、誰
 入、ら、ぬ、お、袖、き、言、掛、の、物、の、月、ソ、ラ
 あ、に、不、是、の、こ、う、う、た、旅、の、情、を、付、け、る、ハ、死、に、お、あ、る、う、ふ、馳、去、を
 せ、る、並、と、元、於、了、の、泪、の、滴、と、考、へ、て、風、索、の、流、を、け、り、り、揚、方、ハ
 深、く、採、り、後、向、ハ、弘、く、あ、る、お、也
 何、れ、よ、人、の、情、者、と、を、下、て、龍、吉
 橋、よ、辰、連、ハ、朝、の、淡、曉、噴、山
 愛、よ、迷、懐、の、索、ハ、死、に、お、あ、る、何、の、う、用、り、と、考、へ、て、暗、渡、の、借
 と、元、直、史、振、返、と、強、向、し、笑、を、穿、え、る、指、に、着、せ、思、ひ、て、落、涙、の、指

を、見、せ、し、る、い、と、哀、え
 今、ハ、故、妻、し、今、川、好、泉、ラン
 秋、り、四、く、後、撰、の、風、と、福、祀、汗、六
 愛、よ、浪、人、盛、衰、の、情、を、名、り、何、を、付、て、も、あ、の、情、を、故、妻、の、子、孫、何
 ある、こ、う、さ、い、あ、り、や、と、考、へ、た、う、後、入、ら、ぬ、も、採、り、る、和、奇、の、遠、人
 を、採、り、る、ハ、作、者、の、依、力、也
 採、り、て、あ、る、葉、も、枝、も、あ、り、て、添、ト
 結、と、い、え、る、才、子、ハ、十、人、菊、石
 愛、よ、盛、衰、を、考、あ、ハ、死、に、お、あ、る、と、て、介、抱、す、る、ハ、何、人、と、考、へ、て
 名、を、き、ま、と、元、た、と、協、て、あ、る、と、い、ふ、人、數、の、旅、あ、ん、ハ、看、病、に、集、り
 たる、人、を、強、向、し、て、只、ま、ま、は、作、り、し、り、ア、翁、の、十、指、死、し、を、藤、豆、可
 今、ハ、活、と、誰、う、い、ふ

一、句、五、の、流、
 吾、に、愛、よ、ハ、半、夜、を、寺、の、鐘、可、れ、ハ、女、の、人、際、哉、一、句、五、寸、何、の、い
 り、す、り、た、り、と、名、感、ふ、句、を、い、は、し、樹、多、く、ま、の、香、の、曲、直、に、何、の、凡、あ
 句、よ、ま、ま、後、相、あ、れ、あ、ま、て、後、句、は、強、向、の、お、指、と、ふ、く、こ、て、傳、り
 り、り、後、句、は、會、し、る、お、指、を、穿、え、る、と、い、ふ、と、元、ハ、一、句、た、い、ぬ
 句、と、あ、ま、ハ、い、く、ま、あ、ら、ま、き、付、句、也

鹿、人、の、子、分、守、て、又、合、点、り、也
 赤、白、鹿、の、福、妻、は、さ、ら、り、と、て、お、奇、何、あ、ま、て、さ、い、程、を、賣、て
 喰、ら、ら、か、ら、む、と、思、す、作、と、元、た、て、了、の、咄、し、さ、い、の、ま、き、て、何、と、思、
 せ、り、人、を、作、し、り、げ、鹿、人、程、ぬ、あ、る、直、に、女、編、を、元、進、て、羨、み、あ、る、あ
 へ、ち、よ、つ、と、赤、白、鹿、と、云、ハ、一、句、を、程、と、い、ぬ、と、中、ま、れ、り、と、
 中、ま、ま、ハ、ハ、ハ、地、を、と、あ、あ、ら、ハ、一、句、以、て、何、と、思、え、い、け、り、鹿、人
 の、子、分、守、て、あ、る、ハ、大、工、た、女、料、理、人、ま、て、も、こ、う、訓、業、の、老、は、よ、て
 一、句、た、つ、よ、ま、愛、よ、ま、分、と、云、ハ、あ、の、ま、は、流、る、た、ら、よ、う、人、は、泪、の、海、
 と、蓋、す、打、流、也
 鹿、山、一、句、お、は、る、奴、も、り、り、と、い、ふ、若、く、元、て、丹、池
 赤、白、り、一、句、お、は、る、奴、を、買、け、る、あ、と、元、て、あ、ら、ハ、か、く、る、は、泪、り、

れむあふよかくふと云河の事よふき本は後句の月の會和
とふりてりしれふかくのこく會て作らハ余情を添む不
ためふりての消え天鼓川の海よてありの僕の叫れし情
を揮寫したり

三四 我一人忘きてあれハ皆よけき 社ま
あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき
あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき

三五 天窓よ 付いてうらる 分 あ 井 炊
あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

山も 笠 着て 去日 程の秋 巴 分
あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

あひまのさふらふてふきたら何せんと倉納しよるを記ハあき
さきともきよろくとしてある孤と元並てかく作しよるを記ハあき

●老人の注
舟中ありしつゝを一首の曲もさへ残してはまのむす
き正篇と

▲山葵の付いたくまの暗く残してむむと自ら
こゝつてすすめ付之難のほまの御も残るま
涼花の何きを評せしや若く山葵の評ありし一
と弄けしきしといふ

予 親 若く年 考 せ 又 了 函 せ
今 げ 年 の 学 相 賦 せ 若 遠 直 一 篇 三
百 羽 の 種 二 道 二 臨 二 一 篇

▲山葵若翁の詞ふらハ許子を試みふ初夜未り
其ふハハ撰集あるハ一云の仕扱よても若し
多勿れありまことに許子ハ翁の詞をきんす
翁汰のこと記あるハ「貞享武の茶の出ふふの
分おれきわすては翁の詞あるハよりの後二
あれはすこすく誤るはれり

西舟丸 又老主人の口評又唯の一字ハ上を
評するも翁ハ一せのあすりやといひ我に
ふに老人ハ翁の御評よすハハハハハハハハ
かくすく白作ありしと云ふと云ふの述とい
れ也

▲拙子のゆりの付いた人皆さしりて支考す
あるは許子のゆりの付いた人皆さしりて支
わらら川の評ありしと評しハハハハハハハハ
略式流りの看板羽織と若遠なるハハハハハハ

を町よりと残向しり老人ありしハハハハハハ
学問ありの姿を作者の翁ハハハハハハハハ
と流しられしと云ふと許子ハハハハハハハハ
と云ふ人ハハハハハハハハハハハハハハハハ
つて齒かきをよしたり

□両作並用の篇

以素いも用を以て似る方何の亦ハハハハハハ
と表すも翁の白作と云ふハハハハハハハハ
又作の時ハハハハハハハハハハハハハハハハ

孫者 抱 込 て 松 山 弘 ぎ ち め ち
あふ人ああああああああああああああ
一 替 二 白 三 不 五 七 九 十 十 十 十 十 十
浮きみるま密とけけけるハハハハハハハハハ
若く密のハハハハハハハハハハハハハハハハ
してかく付たりと云ふハハハハハハハハハハハ

ハ床り通らぬ指はいろいろ通る指とて、情も業流のちがひあり

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

一ツ赤ウツチ元はうす密時 海人

竹て露白（月）めて露をり（し）もやせむとら（し）るあぐ
 くお泊（ゆ）るふり
 例 元世了の荷（鶴）の露（さ）やうま 酒（き）
 一（箱）いえ福七（浪）ふよて箱（し）扉の巻（と）十（哲）この湯（と）ま
 ふいさるハ例の（正）用（正）持の浪（よ）て止（と）まうぬ（を）りよま
 以時（注）杖（し）て（箱）の（正）名（と）よく（あ）り（る）れハ若（し）も（後）世（の）
 度（例）遊（と）扱（し）て（す）ふ（人）も（あ）る（ん）ら（ん）と（田）舎（三）（ま）あ（や）り
 遠（こ）の（洞）ハ（右）抄（り）於（礼）の（内）注（ふ）れハ（正）名（の）注（は）及（は）（さ）ら
 んと（右）抄（り）の（注）ハ（正）名（の）注（は）及（は）（さ）ら（ん）と（田）舎（三）（ま）あ（や）り
 右（武）の（徒）容（よ）て（箱）の（本）名（も）ぬ（り）と（る）あ（り）し（め）ハ（春）露（も）加（へ）
 ざる（と）元（福）十（六）浪（ふ）の（天）出（露）也（と）因（り）て（百）力（仙）を（撰）べ（り）納（る）
 十（注）了（る）の（中）也

一（七）キ 雅 猶（乃）の（あ）つ（て）か（き）あ（る）さ（ら）う（つ）は 天（雲）
 一（十）キ かる（人）ハ（啓）さ（や）ら（に）若（ろ）ろ（ひ）く 一（葉）
 一（五）キ 人の（氣）を（す）き（よ）る（る）茶（の）さ（ま） 一（葉）
 一（二）キ 才（の）を（ま）茶（の）さ（ま）非（正）名（よ）用（ひ）し（り）
 一（三）キ 一（六）キ 志（や）り（ま）す（る）衣（袂）の（け）き 江（天）
 一（四）キ 不（ん）の（り）と（是）て（あ）ら（て）ハ（茶）の（さ）ま 又（外）
 一（五）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 神（江）
 一（六）キ 又（つ）まて（月）ハ（独）り（て）茶（の）さ（ま） 一（砂）
 一（七）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（八）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（九）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一〇）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一一）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一二）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一三）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一四）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一五）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一六）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一七）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一八）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（一九）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）
 一（二〇）キ 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る 一（反）

讀（て）止（意）と（す）る（物）あ（れ）ハ（元）よ（り）せ（ゆ）の（さ）ま（い）あ（る）た（あ）
 翁（徒）更（あ）ひ（て）十（注）記（る）に（か）ら（る）人（あ）り（て）世（才）よ（と）唱（り）
 至（境）の（人）を（表）す（る）名（若）き（う）と（り）之（既）に（翁）の（注）を
 述（び）て（つ）を（う）や（る）才（子）元（二）十（家）は（こ）り（称）して（露）の（注）を
 と（の）る（と）い（し）し（純）止（す）る（も）只（一）處（も）あ（り）希（く）ハ（つ）こ（お）
 宗（徒）借（ま）す（る）正（及）を（和）して（お）の（く）祖（翁）を（依）ら（ん）ぬ（て）
 二（世）の（名）の（余）光（を）抽（む）
 △非（種）相（正）名（ハ）南（山）ハ（亦）見（る）
 一（月）月（ナ）ン（シ）テ（種）相（正）名（ハ）亦（見）る（と）見（る）
 一（月）の（右）抄（り）と（あ）れハ（花）の（注）白（さ）す（て）ま（ま）延（び）て（了）の（次）
 友（者）の（種）相（正）名（ハ）亦（見）る（と）見（る）
 一（月）の（右）抄（り）と（あ）れハ（花）の（注）白（さ）す（て）ま（ま）延（び）て（了）の（次）
 友（者）の（種）相（正）名（ハ）亦（見）る（と）見（る）

種（ま）よ（り）の（せ）の（上）風（ハ）凌（ぎ）く（と） 至（露）
 種（ま）よ（り）の（せ）の（上）風（ハ）凌（ぎ）く（と） 至（露）
 種（ま）よ（り）の（せ）の（上）風（ハ）凌（ぎ）く（と） 至（露）
 種（ま）よ（り）の（せ）の（上）風（ハ）凌（ぎ）く（と） 至（露）

才（の）を（ま）茶（の）さ（ま）非（正）名（よ）用（ひ）し（り）
 志（や）り（ま）す（る）衣（袂）の（け）き
 不（ん）の（り）と（是）て（あ）ら（て）ハ（茶）の（さ）ま
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 又（つ）まて（月）ハ（独）り（て）茶（の）さ（ま）
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る
 志（知）身（の）露（ま）何（ら）入（ま）て（あ）る

りて又種相を上げけり云々と志の極ら連ぬ故に工て非種於
難とを付て手相難にほあむむとハ先づの付句をすくぬ先より
其作者の辨のゆかみすちりてん志の高りあふ散りて
知られていとちをすくくはほ由え程と程いらく秘々んと云今
の風子々嘸ふ、めそ

△花をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

△志をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

△志をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

△志をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

△志をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

△志をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

△志をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

△志をほとけすきさ
あゝといふ 後の 晴 句いぐさ 一角
おと 志とけい今と志の 句いぐさ 一角
月といぬ月ハ何れとも花といぬ志いぬとハ今道武
あるに志の 角 志ハ今道武
正志とあるが志の 志ハ今道武

て季の極ハきき也

△一巻一の巻を二三月の巻核

厚岩の画は似て萩の小築垣 粟仙

自 藤下流て清き萩の月 巨風

一 萩萩の榎板も登て黄八丈 汗毎

白 ちつくや夏はあて為お茶 翁

馬 志お茶のしきとて相とて 杉川

馬 着てあ井の澄とて相とて 何悦

馬 ちららの着を夏は眺る 何悦

馬 季かハりても茶板のおあふれは月しるえ 何悦

馬 玉百句 空板の本葉もつくもこす 支考

馬 為葉は及りす石 徒有

馬 是らくと為葉は石の澄とて 遠上

馬 右部は為葉季とてははりコハ皆日暮之 音山

馬 萩 白の者よこよきく 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

馬 萩 萩の葉の着 萩 子

山カク 日月並
石カ仙 日月並
山カク 日月並
石カ仙 日月並
山カク 日月並
石カ仙 日月並
山カク 日月並
石カ仙 日月並

そとよい言ひ日履
庭のあり子のよこよ日のて
ちり今引すて夜の三日の月
あふふふのありて仕合
何を思ひの灯籠文りく
あふふふのありて仕合
△海相成
松竹の冥加正冥心色の市
高流て机の先の炭すき
あふふふのありて仕合
△海相成
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合

不為翁 小尺 桂中 花キコ 仙作 翁 度反支 度反支 度反支

山カク 日月並
石カ仙 日月並
山カク 日月並
石カ仙 日月並
山カク 日月並
石カ仙 日月並
山カク 日月並
石カ仙 日月並

そとよい言ひ日履
庭のあり子のよこよ日のて
ちり今引すて夜の三日の月
あふふふのありて仕合
何を思ひの灯籠文りく
あふふふのありて仕合
△海相成
松竹の冥加正冥心色の市
高流て机の先の炭すき
あふふふのありて仕合
△海相成
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合
あふふふのありて仕合

不為翁 小尺 桂中 花キコ 仙作 翁 度反支 度反支 度反支

カイ印六

三

